一日の夕暮何心なく我が家に歸りて行燈を引出さむとせし折しも、さッと往來の格子窓より一封の書狀を投込みしものあり、拾ひあげて見れば筆跡に覺えなけれど正しく宛名は高倉長右衛門殿の七字、

我等兩人今度改而爲討手差向候、但し舊來御懇意の者故わざと出合次第名乘不申、其のまゝ無言に打込候間此段前以而御斷申上置候

實は武士としての本懷、卑怯の振舞に相成、甚だ以而心苦敷また殘念至極に存候へども今日の成行かくの通り無是非事と觀念致居候

長右衛門、じッと見詰めたるまゝ、息を含んで思はず小首を傾けぬ、

其六十五

黃昏の格子窓より投込みし一書の文面に、高倉長右衛門、おもはず眉を顰めて小首を傾けながら、偖これがため喰ふべき時刻の夕飯に一粒たりとも遲速增減のあるべき男ならねば、靜かに行燈を引寄せて悠々と半日の空腹に箸とりかけし折しも、また隣屋の手を經て神尾老人よりの一封、何心なく披き見れば、兼て內々その筋に探らせ置きし例の二十五人いづれも俄かに本國へ出立せしとの事、

さては投込みし一書の當人こそ、正しく二十五人と入替りて新たに來りしもの、加之も舊來の懇意わざと名乘らず出合次第の無言に打込めば前以て此の段を案內いたし置くとは、同じ二人ながら田島勘作と川上傳太郎の二人よりも聊か手剛く見ゆる奴、また卑怯の振舞に似て元來の不本意なれど今日の成行かくの通り是非なき事との添書は、猶更武邊の業に物馴れたる性根の圖太き奴そも〳〵當時の會津城中この高倉長右衛門に對うて以上これほどの先觸を

かけつょ討手に出來るもの彼れか、是れか、誰なるべきかと思へども、固り姓名を包ンで平生の筆跡まで變更たれば、たしかに何者といふ心の的なし、僅か三年の間に前後打つゞいて六十四數ふれば君を見限ッて涙と共に本國を立退きしもの、いかなれば二君に仕へぬ浪々の我れたゞ人、加之も他家に奉公せしものさへある其の中に、西川兄弟とて我れより進ンでの業でなく、一人、かくまで執念深く君の御怨恨を受けしか、また其の後の田島は何とせしやら川上とて不意の抜き打に知らで殺せし我れ、いはゞ聲も立てず目色も動かさで世に忍ぶが如き今この我れを、不倶戴天の仇か極悪非道の曲物に等しき追窮の御取扱ひ、さても其の意を得ざる御無體の思召ぞ、まして浪々以來の我れには猶更厚く身に浸む神尾老人の恩義さへ、今の境涯より以上の取持沙汰を一切うかと受けざるは舊恩を踏潰すの恐縮あればこそ、さるを斯くまで際限なき無慈悲の御憎味を蒙る上は偏に我が身の不運、よく〳〵主從の緣なき事、もはや致し方なし、武士の意氣地として何物にもあれ、どれほどの討手にもせよ、いかなる仕手にもせよ、一刀兩斷、この腕節に向ふ奴、この太刀筋に近寄る奴打合ふ刃音もさすべきかと、高倉長右衞門うまれて三十一歳、こゝに始めて見付次第の敵に我れより踊り込で斬入る猛勢、おもはず燈火を掻立てょ心試しの一刀すらりと抜放てば、折しも隣屋より入來りし例の四十女、きやッと叫ンで氣を取失ひぬ、

其六十六

二十五人に入替りて新たに討手に來るほどの奴、加之も前觸の案内狀を投込で、何處なりとも出合次第に斬込まむとする奴、わけて舊來の懇意といふからは、この高倉長衞が腕も膽も承知の上の死物狂ひに二個の屍を竝べて一個の首を取らむとする奴、志は殊勝ながら、西川兄弟にも、川上、田島の兩人にも生命を吳れざりし我れ、今更容易く仕てやられてなるべ

きかと、怖ろしや、この大剛の不敵に生れついたる男、さらに其の後の油斷なし、まして今こゝに斯くまで覺悟の討手を一刀兩斷、ものゝ美事に打果したる上は、いかに執念深き思召も聊か今後の我れに手を置き玉ふべし、よし然なくとも再び無用の手柄顏に萬一の功名を覘ふ者なかるべし、一つは餘所ながら舊恩を受けし君への諫言、一つは眼前に同藩の誼ありし人々への懲戒また我が身に取ては罪なき殺生の仕終、さらば猶更の事、なまなか打合ふ白刃に入らざる義理人情を含ンでは却て自他のためならずと、いよ〳〵決心の底を取堅めし高倉長右衞門、顏色にこそ出さぬ、猛獸の餌食を待つが如し、

その後の出づる毎には必ず頭髮を梳りて湯に入りつゝ、肌に新調の白襦袢を重ね腹に一反の晒木綿を卷付け身輕き衣服を纏うて袴の裾を短く穿ち、目釘を改めし大刀の柄端に緩く網笠の紐を掛けながら、紛れもない面上の太刀痕を白晝の雜沓に曝して、敵に探さるゝ身が敵を探し歩く心體、一日早く出合はゞ、一日早く雙方の埒あくべき事ぞと、悠々たる肩を怒らし寬々たる身を反し、猶更絕えず市中の中央を往來してのそり〳〵と歩み出す骨法面魂ひ、一際おそろしげに目立ちぬ、

されど眼中、それかと思ふものにも出逢はず、やれ面倒ぢや待遠しと、わざ〳〵其の後は市中の繁華雜沓を避けつゝ、敵に取て打込み易き町々の裏外れ、人影うすく往來の淋しきところを選ンで步みしが、例の一書を投込みしより十日あまり後、一日の夕ぐれ近き千住の歸途、蓑輪の里も打過ぎて金杉の此方、上野の森を打仰ぎながら、坂本の辻まで來かゝりし頃、ふと見れば往來へ差出でたる椎の木の根方に朧富士の編笠深く憩へる旅姿の武士一人、長右衞門おもはず步を停めて、じろりと見れば、その武士また此方を見返りて、うちかけし腰を立てゝ動く體、

其六十七

千住街道の蓑輪を過ぎて金杉の邊り上野の森影といへば、同じ江戸ながらも市中に遠く往來の人聲うすく、まだ殘る村名の在家ちらほらと加之も夕ぐれ近き田舍道、その坂本の小高き丘より差出でし椎の大木の根方に腰うちかけつゝ、はや日は傾き夜露には早きを朦富士の笠深く瞰ひし旅姿の武士一人いかでか此の頃の高倉長右衞門が目に見遁すべき、おもはず歩を停めて、じろりと見ればその武士また思はず身を起して、歩み出さむとする編笠の動き工合、さては紐を解て頭に載せたるばかり、いざといはど脫捨てる用意ありと知られぬ、折しも互ひに隔てし其の距離は十間あまり、

つか〳〵と歩めば、のそ〳〵と立去りながら、俄に腰邊を探りて何をか物を置忘れし體、彼方より立戻ると此方より歩み出すとの雙方、また元の同じ椎の木影に摺れ合ふ如く行違ひぬ、

十間あまりを隔てゝ笠の動き工合に日早く紐の解きしを知れる長右衞門が眼力、まして近づきながら、ちらと見れば、なぎ袖の薄衿を纏ひて野袴に股引脚絆、加之も鼠木綿の腕差に旅路の小皺もなくて手首は不相應なる太き體、や、鑓帷子を著込んだる奴ぞと、摺合うて行違ふや否、わざと大刀の鐺を相手の腰骨に突當てぬ、

『御免なりませ、うかと致せし事』

振返へりて目禮すれば、編笠の端に左手をかけつゝ無言の會釋。

また其のまゝ五六歩、うしろに氣を配りながら歩み出せし路傍の草叢より、さッと飛出したるもの、蛙を覗ふ蛇かと思へば分銅を結び附けたる一丈ばかりの苧繩、右の脚首に搦むや否、ぐいと引絞られて流石の長右衞門、横ざまに伏轉びし面上へ同じ草叢より電光石火の一刀、寸隙もあらせず編笠跳ね飛ばして打込來る一刀、等しく太刀風を鳴して前後の夾擊に斬下さ

れぬ、

不意に脚を搦まれて倒れし間一髪を雙方もろともの矢聲に斬込まれし長右衞門、いかに大膽の男たりとも遁るゝ道のあるべき、あはれ兩斷になるかと思ひの外、ころ〳〵と手鞠の如く三四間を轉げ行きながら、すツと拔放したる大刀の早業、たゝみかけて追來る敵の一人を逆に斬上ぐれば、あツと叫ンで迸る血煙の中より、また身を轉がして彼方へ三四間むくと起上るや否、殘る一人の白刃を飛違ひの横なぐりに一太刀ずばと斬り込みしまゝ木葉の散るが如く跳退いて、もはや大地に根を持つ磐石の體、仁王立に睨めば、眼前に敵の死骸二個血糊を浴びて横はりぬ、

ほツと大息を吐きつゝ我が身を見返れば、みごと外せしと思ひしに、打倒れし瞬間を寸隙なき雙方の鋒鉾にしてやられしか、右の肩口と左の臀に二箇所の手疵、いかにせしやら、また

左手の手指と藥指の二本を中程の節際より斬落されぬ、

さても案外の手柄に働いたる奴、舊來の怨意そも〳〵何物ぞと近づいて見れば、轉げながら逆に斬上げたる我が一刀のため顱下より耳の根際を頭腦まで斜めに割りし無殘の面相、血に染みて誰とは知らねど亂れし白髮の悲慘さ、はて不思議の討手と一人また此方に横はりし敵を見れば、腰車より瞬の邊まで斬込ンだる體、もし肌に著込の鎖帷子なくば胴斬になるべき筈の面相、や、正しく久世弘一郎。

長右衞門、おもはず身を縮めて立退きながら、もはや二目と見も得ざる白髮の死骸は父の弘藏、我がためには今日この太刀筋を教へ導かれたる昔日の師匠、あな恨めしや、さても〳〵酷たらしき父子の者を討手に差向けられしぞと、悲憤の血の涙もろとも會津の空の方角を睨み詰めぬ、

其六十八

いかほどの許し難き御憎味あるやら、どれほどの執念深き思召あるやら、その剛臆と強弱は偖置て會津四十萬石の人中より、討手も討手に依りけり、わざ〳〵この高倉長衛がために昔日の恩師を選ンで討手に差向けらるゝとは、

ましてや今年こゝに六十四の脛腰、わけて先君の記念に生殘りし哀れの老人を、當世無用の老耄と知行を召上げ城下へ追退けながら、今更俄の無慈悲に引攫出して、迚も遁れぬ我が白刃の下へ刑餘の罪人に等しく投込まるゝとは、

さぞや人しれぬ老の心に遣瀬なき血の涙を含ンで、いかに無體の君命を苦しき白髪の頭に戴きしか、さればこそ、わざと例の一書に姓名を包み筆蹟を祕しながら、せめて行末の武運を開くべき二十七の子息を引連れ、何事も昔の夢、今は誰一人に語らう友もなき老衰の身を引

起しつゝ、父子うち揃うて我れに顔みる寸隙もあらせず無言のまゝの太刀打、

加之も我れ、さりとは知らず平生に增しての活動、思はぬ不意に脚を搦まれて打倒れしがためとはいへ、天晴れ尋常の美事に武夫を斬るべき太刀筋を心得ながら、頭の下より耳の根かけて白髪の頭腦を瓜の如く逆に斬割りし見苦しさ無殘さ、また父を討たれて無念に狼狽へし一子の腰車、それと知らば偖あれほどまでの早業に深くは斬込まざりしもの、わけて一入の痛ましさは父子もろとも兼てよりの死覺悟、猶更讀むにも見るにも堪へぬは我れへの芳志、おの〳〵懷中へ用意の一書を金子に卷添て『相手方に毛頭遺恨無之候間我等死骸此の儘御取捨被下度黃金三枚爲投込料相添候以上』とありし潔白さ健氣さ、そも〳〵斯くまで優しく馨ばしく悲哀に打連れたる父子を無益の我が討手に追立てられしとは、思へば恨めしの君よ、さても無慈悲の思召や無體の御所存や非道の御意ぞ、酷たらしき御振

舞ぞ、もし我れこの高倉長衞に兄弟あらば其の兄弟を討手に向けらるべし、もし親あらば親を其のまゝの仕手に選ばるべし、やれ怖ろしの君よ、今までは斯くても舊恩の重きを身に荷うて我が境涯の輕きを忍びつゝ、蔭ながら餘所ながら偏に御運の無事繁昌を祈りしが、もはや今日よりは一切こゝに加藤家を忘れて高倉長右衞門いづこの誰を憚り何を心に苦しンで忍ぶべき、求めねど自然の緣あらば時に從うて二君にも仕へむ、好まねど退くに退かれぬ場合は隨切この上に御愚味を眞正面の胸板に受けて見む、あまりの事に今は却て面白しと人しれぬ心の底に冷かなる微笑、

其六十九

讃州高松の城主生駒壹岐守、江戸參勤の年限滿ちて歸國の道中、東海道小田原の宿を朝露に今日箱根越の旅行列、はや城下の大木戸を離れし頃、山崎の立場茶屋にて先供の同勢が立騒ぐ體、

折しも乘物を吊せて馬上の壹岐守、蹄を停めながら何事ぞといへば、あの葭簀蔭より御行列を編笠越に窺ひし曲物衾議のためと答へぬ、

壹岐守は當時に唄はれし諸侯中の伊達者、加之も寛活の氣輕き性質、さらに何の思案に及ぶ風情もなく、其のまゝ悠々と馬を進めしが、こゝかとばかりに立場茶屋の軒下じろりと馬上より見下せば、編笠を剝取られて六七人の徒士に引据ゑられながら大地に跪きつゝ見上ぐる浪人の面上、いかにも物凄き太刀疵を旭日に照して猶更一癖あるべき面魂、

其のまゝ無言に打通れば、其のまゝ許さるゝが道中の凡例ながら、武士としては金箔の估券浪人には可惜ら捨物、あまり美事の男振に思はず馬上よりの聲、

『いづれの者ぢや、どれへ通るぞ、姓名を申せい』

『は、元は東北の生産、近年は江戸の町住居、申上ぐるも恐れながら高倉長右衛門とて幽かに其の日を送りまする浪々もの、二月以前より塔の澤の入湯に疵養生いたし、今日、やうやう本復、これまで出立の折柄、元來が田舍生育の不作法に御行列の差控様も辨へず、かく御咎を蒙りまする次第、かぶりもの此のまゝにて罷り在りましたる儀は、御覽の通り見苦しき面上を憚りましての事』

『その疵は元來、いつごろの事ぢや、近ごろ養生いたしたとは見えぬが』

『は、お目を汚しまする面上と横首の疵は、久しき以前の古疵』

『ム、其の多に新しい疵あるとか』

『聊か二三箇所』

『や、面白い仔細ありけの者ぢや、なるほど左手の指二本も無いの、幸ひ道中の徒然、迷惑ながら今夜の宿まで』

『案外の御意、あまり冥加、この不具もの何卒、此のまゝ』

『いや〳〵、おもはぬ野路に名物鷹を拾うた心地ぢや、いかな音が出るやら、その疵に物いはせて見たい、今夜を娯しう待つぞ、こりや者ども手厚う致して取らせよ』

其のまゝ蹄を早めて過行けば、今更去るに去られぬ高倉長右衛門、俄の打て變りし待遇に前後左右より催されぬ、

其七十

小田原を東天の朝露に立出でて、その日は海道隨一の關所越箱根の山に傾く夕陽の三島宿、はや黄昏の本陣に馬を繋ぎ乘物を舁入れ伊達道具を横たへて、いつしか同勢の混雜も靜まり し後は、たゞ門前に生駒壹岐守宿とせる筆太の立札のみ得意顔に威儀を正しぬ、

旅路ながらも殘る方なき兼ての用意、本陣の奥深き大廣室に壹岐守が打寛いたる滿面の微笑山海の珍味と近從の居流れたる末席には高倉長右衛門が平伏せる體、隈なく照渡る燈火は輝いて白晝の如し、

『さぞ迷惑でがな、されど武士としては一段の男振その疵が許さぬぞ、加之も紛れない美事の太刀疵、まだ外に新しき近來養生の數箇所ありとは猶更以て見遁せぬぞ、たゞ一場の座興にするばかりでないちと量見あッての事ぢや、さなくとも元來の眉目といひ、骨格といひ、無うて叶はぬ筈の來歷を包まず聞かせい、や、見れば見るほど何とやら勇まし氣に小氣味のよい男、道中ぢや旅ぢや、身の尊卑は入らぬぞ』

『は、いかに御旅中の御慰みとは申せ、いづこの草を敷寢の者とも知れぬ奴が、まして不所存の不具證據を案外の御賞美に預かり、かくまで過分に有難き御意、この浪人もの奴たゞた

だ冥加至極に心得まする』

『いや無禮講ぢや、じたい其の方の疵は身體に何箇所あるぞ』

『お目に止まりまする面上、斜めに額際より目鼻かけて頤までの太刀疵一箇所、槍の穗に咽喉を突外されて首筋の横を殺がれましたる一箇所、同じ槍にて脛裏に一箇所、また左の二の腕に刀の鋒鉦一箇所、以上の四箇所は古疵、今回、塔の澤にて養生の分は右の肩口に一箇所左の臀に一箇所御覽の如く左手の小指と藥指の二本を失ひましたる新舊あはして七箇所』

『相手は何人ぢや』

『都合六人、但し其のうちの一人には、幸ひ袖を貫かれましたるのみにて』

『ム、其の六人の相手、いかど致した』

『そも〳〵最初の一人、これは何としても倚、叶ふべき筈のない御人、その他は一切、無益

の殺生とは存じながら退くに退かれぬ是非なき場合、いづれも仕留めまして御座りまする』

やれ働き者ぢや、ついては猶更の事、いち〳〵相手の身柄と其處まで成行の仔細、また其の方の來歷、當時の境涯、今後の希望、委しう聞きたいぞ』

『重ね〴〵の有難き御意ながら、當分のうち、いかやうの御方樣にも暫時、その儀ばかりは』

『ム、然もあらう、それほどの働き仕て來た以上、いづれ身に取て、外聞を憚る用意專一ぢや、なれど壹岐守には安堵せい、身のため悪しう聞かぬぞ』

『恐れながら、以上の相手とて、拙者奴より仕掛けたる場合さらに一度もなく、初太刀は必ず敵より受けて後、二の太刀にて打果しましたるもの、よし然なくとも、自己が罪を包む業には不得手の男、身の用心に世間の外聞を憚る調法沙汰は猶更の事、せよと仰せられても出來ぬ筈に生れついた奴、たゞ當分いづ方へも相手の身柄姓名と手前の來歷所存を申上げざるは、聊か他に仔細ある儀、さて〳〵當世に不似合の白痴者と思召され、此奴このまゝ御宥免のほどを偏に願ひあげまする』

其七十一

おもはぬ小田原の山崎にて生駒壹岐守に見出され、心ならずも箱根越の三島宿に伴はれて、目に見ゆる手疵の箇所と相手の人數を答へし外は、いかに問はるゝとも一切の素性來歷を包みしに、大名と浪人の間には太平無事の今日、あるまじきほどの分に過ぎたる待遇をうけつつ、加之も山海の美味を盡せる酒肴の後に黃金十枚の目錄、その夜はなほさら諸士中の上席分に取扱はれて一宿の曉となりぬ、

はや內外の用意も濟み同勢の行列も整うて本陣の玄關へ立出でし壹岐守、高倉長右衞門は式臺に跪いての額越、

『御道中いよ〳〵御機嫌よく、謹ンで御見送り申し上げまする』

『や、きのふ一日、前夜にかけて無體の我がまゝを申したが偖これも縁ぢや、其の方も隨分身を大切に致せ』

『は、有難き御意』

『もし身の便利になる事あらば、いつなりとも本國へ立越せ相應の助力は取らすぞ、また江戸在勤の節は猶更、近う屋敷へ出入いたせよ』

其まゝ乘物にうつりて門外まで出でしが、また俄に長右衛門を差招きながら、そッと聲を潛めて私語きぬ、

『生涯そのまゝの浪人ならば兎も角、それで可、なれど萬一もし奉公仕官でも致さう時には必ず忘れまいぞ、誰彼よりもこの壹岐守が先口ぢや、夢にも逸物め餘所へ逃出すな、無挨拶にて他家の知行取致さば、生駒家總體の敵手と覺悟せい、ハヽヽヽヽさらばぢや』

重ね〳〵無慈悲の的にせられ執念深き討手を差向けられ、果は我がために昔日の數をうけし六十四の白髪老體を差向けられて、悲慘それとも知らず恩師の父子もろとも打果せし高倉長衛が心には、たゞ道中一目の緣よく斯くまで打ち解けられて、餘所へ逃げるな逸物この壹岐守が先口ぢやと優しく耳朶へ私語かれたる一言、いかに嬉しく身に染々と徹へけむ、さても酷たらしき君よと悲憤の涙を浮べて會津の空を睨みし眼と、さても奥床しき君よと心地よけに微笑を浮べて過行く行列と伊達道具を見送りし眼と、同じ身ながら人しれぬ心の情は黑白の相違、

ましてや男一代、たとひ萬石の高祿をもて召還さるゝとも生きて再び歸れぬ家あり、わけて武士冥利、たとひ一合の玄米を取らずとも喜ンで忘れぬ家あり、

其七十二

きのふは今日の昔、いづこの里も花は夢、鎭守の森の木葉も秋の末に散失せて、はや冬空の枯枝に朝夕の霜白く、その隙間より幽かに會津の城を見渡す西田村の片端、藪陰を流るゝ水の音さへ淋しけに庭の小石と私語て、草屋の軒深き門口を戻り馬の鈴音ちやら〳〵と過行けば、背門の裏路傳ひに自己が家路を急ぐ野唄の聲々、猶更物思ふ身に浮世の哀れを添へぬ、捨てゝ惜からぬ足輕奉公ながら、やう〳〵此のごろ習ひ覺えし勵鍬の手を放すや否、燈火の下に六十近き白髮の禿頭を埋めて、子ゆゑに一日の疲勞も厭はず、また孫ゆゑに手馴れぬ麥藁細工の小林兵助、その影に添乳の小唄をうたふ娘の小夜を見返りて、思はず我れを忘れし老の微笑、

『や、出來た〳〵』

『あれ父樣の大きい聲』

兵助、我が子に叱られながら、はッと首を縮めて添乳に睡る孫が寢顏を差覗きつゝ、俄に聲を潛めぬ、

『これ見い、天晴な武士人形を出來したぞ、今夜そッと此のまゝ枕頭へ置いて、翌朝の目覺の際ぢや、ハヽヽヽどのやうな笑顏をするやら』

『えゝ父樣の氣のない、花か鳥でも仕て下さる事か、この子に武士人形を、妾、妾も武士は』

『また白痴た事をいふぞ、町人の子でさへ男兒の玩具に算盤は持たせぬものを、わけて武士も武士、會津四十萬石の武士中でも飛放れた一流、凛とした人の子に生れた孫ぢやぞたとひ假初の麥藁細工にせい、まだ〳〵若黨家來の供人形率馬立道具まで、みごとな行列を取揃へて武運めでたう行末の出世を祈る氣ぢや、もし生涯に事のない町人百姓が希望なら其の、

その孫を置て何處へなりとも勝手次第憂苦勞のない安樂な處へ嫁入せい、まだ幸ひ花も二十歳の見苦しうない容貌さうで無うてさへ蒼蠅いほど緣談を言込まれる折柄ぢや』

添寢の乳房、そッと放して襟掻合さず其のまゝ起直りし眞白の胸前、包むに餘る口惜氣の小膝を燈火の影に摺寄せながら、亂れし鬢の毛も哀れや今日この頃の誰がために色香を作る風情なく、いきく〳〵と張切りし目元に涙の露雫、

『嫁入、父樣、この妾を、どこへ、今更何處へ嫁に行けとの御言葉』

『やるとは言はぬぞ行けとも勸めぬぞ、なれど勵鍬の草臥も忘れて、やう〳〵二夜がけの手細工に折角から出來したものを、この子に見せて下さるなとは何事ぢや、武士人形が嫌で濟む子を持た身か、高が足輕奉公ながら城下を立退て今この西田村へ世を忍ぶも、我が身を捨てゝ母子が行末を思へばこそ、武家氣質を見せられぬ孫は持たぬ筈の祖父ぢやぞ、無事に御

殿の御意を伺ふより天晴れ浪人するだけの仔細あッて浪人なされた御人ぢや、また何處の里へ行かれても尾羽うち枯したまゝの浪々で朽果てる御人と思ふか』

『えゝ知れたこと、きゃたうもない、いはいでもの事を、それなればこそ、この子をせめて五歳になる曉、この和子樣を抱て、たとひ何處に御座らうとも、搜しあてよ、お目にかゝりたい一心で、ム、小夜か、よく育てたと、たゞ一言只その一言を聞きたいばかりに』

『いふな、わかッたぞ、もう其の上の事いふてくれるな』

『いえ〳〵、いはいでか、それほどの父樣が此、この妾を何處へ、外の事か、この子を置いて何處へ嫁入せいと』

『あやまる、あやまる』

『あやまられても、父樣でも、こればかりは妾の心に、朝夕神樣、佛樣へ念願かけた妾の心

に、それ聞捨にして申譯が立たぬ』

『立つ、立たぬとて父子の間に、じたい何とすれば氣が濟むのぢや』

『こゝでこそ父樣、つね〳〵の希願、妾に、妾に身の暇を、もはや氣が急で五歳までは待たれぬ、今この和子を抱て江戸へ、確に御江戸の空、また御顏は一目に知れる筈の證據もある事、よし證據なうても、これほどの一念で、いかな身の難儀すればとて、お目にかゝらいでか』

『やあまた例の難題が始まッたぞ、うかと平生の術に仕て遣られた、ハヽヽヽ今夜ばかりは許してくれ、ハヽヽヽ』

泣ても笑うても果は其のまゝの父子、そッと餘所を憚る浮世の草屋に軒深く、窓を打つ木枯の音のみ心ありげに冬の夜の燈火を動かしぬ、

其七十三

諺にいふ水入らずの父子、あまり滑かに隔意もなう打解け過ぎて、餘所には知られぬ朝夕の内證、つい我れを忘れし怨み顏に小聲ながらの爭ひも、あはれや今年やう〳〵二十歳の思ひに堪へ兼ねて過ぎし情の戀しき女氣と、現在の孫より外に浮世の希望もなく氣を取られし老の一徹さ、其のまゝ泣て強ねて物さへ言はぬ一夜の曉方には、背門の枯草に霜は置くとも、互の心に前夜の露も雫もなし、

東の窓より旭日影さし入れば、父の兵助、一摑の玄米を手に握りて裏口に立出でつゝ此の頃の冬空に畦の落穗もなくて我が家の軒に囀づる群雀を見上げながら、一人の孫が行末めでたう達者に守れよと、心なき鳥類にまで老の情をはこぶ獨り言、

また娘の小夜は思ふ心の春ならねど、いづこの里にも人目に立つべき花は花、その色香を草

深き窓越に包みながら、すや〳〵睡る幼兒の寢顏を見返り勝に釜の下の薄煙、さて今の境涯、ありし往時のやうには身を粧らねど、現在その人に對ふが如き風情、朝まづ初炊の影膳を江戸の方角に供へて、そッと兩手を合しつょ武運長久の念願、わけて一日も早く逢ひましたいが心の山々、やがて我が子の目覺めし聲を聞けば、それ父樣より下されますぞと、其のまょ枕頭へ押直して、持てぬ手に箸を持添へる哀れさいぢらしさ、

もし東の空に浪々に夜更けし後の寢覺勝なる高倉長右衞門、かくまでせらるょ父子の情義を眼前に見れば、大地の根を持つかと疑ふ五體あの頑たる鐵骨にも徹へでやあるべき、まして猶更假寢の夢に產落されしまょ父の顏も得しらで玉のやうなる我が幼兒を見れば、鬼神も怖れぬ不敵の面魂あの太刀痕に縫はれたる物凄き眼中いかに一滴の涙を宿すぞ、

風は軒端を傳へど其の後の思ふ心は通はず照る月影は曇なく冴ゆれど別れしまょに互の姿は映らず、空飛ぶ雁は時を違へず、往還れど翼に文の音信もなくて、いつしか人しれぬ涙に流れし二年越、

『のう小夜、長いやうで早いは星霜、もう二年は過ぎた、泣ても笑うても、や、あと三年の辛抱ぢや、五歲になるぞよハ、、、、、』

『たとひ土に喰付ても、石へ噛り付ても妾の身は病煩らうても、五歲の曉までは父樣、蟲の氣もなう育てあげて、誰に似たやら、あの目元、口元の凛々しさ、えょ早う見せましたい』

『いや、土に喰付かずとも石へ噛り付かずとも、奢らねば父子二人が生涯、この儘田舍氣質の安樂に過されるやう、人しれぬ內々そッと仕て置て下されたに、うか〳〵と病煩らふと濟むかい、無事に育てあげた五歲の曉お目にかけるばかりが手柄でないぞ、また第一あれほどの御人ぢや、氏素性は無うても我が種を產落した女、その子だけを引取ッて憂苦勞した母親

を突放される筈はない、どこまでも身を大切に、ならう事なら自然の色香も落さず用意で置いて、めでたく、この父こそ夢さら舅とは言はぬが、子まで出來した緣ぢや、その身には婿と言はせたい』

其七十四

見渡すかぎりの畑に一皮、眞白く包みし朝霜は消失せて、いつしか水田の氷も解けし稻村の片邊、きら〳〵と照る冬の日盛りに心地よげの背を曝しながら、手切莨の煙さへ浮世しらず の空に長閑けき野男四五人、投出す泥脛を勦蹴の柄に持たせて、喚くが如き高笑ひの聲々、

『また此奴と脊骨の一打二打、くらはされても倦、言出したいは村外れの垣根越ぢや、どこの野山も霜枯の今日この頃は猶更、あの花め、とりわけ目に瞥らついて人迷はせに咲いた女、たとひ地頭の行列を横ぎる男でも、あの門口を佛性では通れぬぞ、ハヽヽヽ』

『いや鬼のやうに日を經ても叶はぬ證據は、何物の種やら細工やら、城下仕込の肉塊を產落した女ぢや、まして阿父は物堅い武家奉公して來たといふ禿頭、年が二十歲で片相手の男が無いと思へばこそ、むざ〳〵と可惜花の散し捨て、つい煩惱に仕てやらるゝが、ありや石地藏の化物と見て置け』

『さあ其の片相手ぢや、女護が島へでも吹流されたか、あれほどの花の色香を、この草深い片田舍へ置捨に埋込んだまゝの一年越、ちらと通うて來た姿も見せぬとは偖々、男冥利に出來過ぎた氣強い奴』

『や、たのまれもせぬ修羅を燃して、これほどの深い餘所の情よりは、得て女氣といふ奴が不思議ぢや、現在その罰あたりの氣強い男面を朝夕、あの美しい小胸のうちで人しれず、をりをり戀しい夢の覺めた曉方、そツと泣き居らうぞい』

『せめて其の泣顔が見たい、拝みたい、あの父子に打解けて心易うする奴、じたい村中で誰ぢや何奴ぢや』

『城下から引移ッて来て二年越の朝夕、出るにも入るにも鼻と鼻とを突合す此、家數の知れた村中で、どいつ此奴もない筈なれど、偖あの父子ばかりは義理に呼ばれた客室の生花を見るやうで、いつ逢うても笑顔の腰低に挨拶されながら、その挨拶が勿躰の百姓交際には固過ぎた挨拶振で、剛々しい野面も出來ぬ中に只一人、近來、ふしぎと親類めいて心易う出這入する奴があるぞよ』

『何ぢや、あの父子へ親類めいて心易う出這入する奴がある、それこそ鎭守の火事か檀那寺の地震よりも大事、其奴うか〳〵村には置けぬぞ』

『や、噂の影法師その其奴め來たぞ、來たぞ、あの田圃路を見い、地の底の黄金でも掘出す氣か、照ても降ても年が年中仰いだ事のない懐手のまよ、ハヽヽヽあの名物男ぢや』

見れば三十前後の大男、この山國の寒天に手織の古袷一枚、あけ廣げたる素肌に雙手を組入れて、きよろりとせし眼に脇目も觸らぬ自己が脚下の左右を見廻しながら、泥田に踏入れし破草履も其のまよの毛脛を内股まで現しつよ、どこやらに氣ぬけの五體ほッとせし西田村の名物といへば誰も知る白痴の久藏たど一人、

『やれ〳〵彼うツそり奴か、ハヽヽヽ彼奴なら親類めいた出入は偖置、狼狽た月下氷人に手曳せられて夜半の枕頭へ這ひ込ンでも氣は揉めぬぞ、安心ぢや、ハヽヽヽ』

其七十五

同じ足輕奉公ながら親重代の軍役に組込まれし身とは違ひ、中年より株を買うて勤めし小林兵助、よる年波に辭して去れば誰に憚かるところもなく、また娘の小夜とて男手一個に育て

兼ねしを幸ひ平生出入の高倉家に召使はれて、その主人が本國を立退く時に世間の人目まだ袖に包みし情の種、この西田村の片陰に落著て後、やう〳〵産落せしかば、父なし子とはいへ誰に心を置くべき筈もなく、まして士分の爪の垢にも足らぬ端た給金なれど二十年來の身の冥加を積ンで、父子二人に孫一人の行末を過すだけの田畑こゝに求めしといへば、どこに疑ばるゝ恐れもなし。

されど高倉長右衞門といへば固り會津の粒選に數へられし一流の武夫、わけて怖ろしき君前の太刀疵を生命冥加の面上へ主從緣切の名殘に止めしまゝ、加之も本國の立退際に槍の名を得し大小姓の西川三左衞門が屍を置土産にせしほどの男、その人の家に年來の恩をうけつゝ久しう出入して、美貌の人目に立ちし娘を無妻の身に近く奉公させしのみか、第一は片親の知れぬ孫のためもしやと思ふ心に餘所ながら其の後の取沙汰、をり〳〵城下の馴染甲斐を訪づれて、きけば聞くほどの風聞いよ〳〵高く、あはれ西川の舍弟を返り討にせられ、二十五人の面々も手を空しう呼戻されて閉門、川上傳太郎も仕てやられしとの事、田島勘作は如此如此の最後、これこそと思ひし久世父子も叶はず枕を竝べて犬死せし今は、もはや會津四十萬石の的となりし仇敵、いづれ遁れぬ筈の運命と聞くや否、兵助、はッと驚いて遁げ歸りぬ、顏色にも出さず口には猶更ら言はねど、老の心一個に人しれぬ其の後の朝夕、わけて草屋の軒深く娘を戒め孫を抱かゝへて、わざと村の人々へは餘所々々しう、たゞ打解けて窓越の往來に呼入れながら憂を忘るゝ談話相手は、藪陰の細流を隔てゝ家ともいへぬ藁小屋に住める獨身住の村名物、罪も報いもない白痴の久藏ばかりへ父子が心易氣の笑ひ聲を漏しぬ、

『伯父御は在家か』

背門の垣根越に生きたまゝの獄門首を上せて差覗きながら、破鍋を石疊へ振落せし如き大聲、

さては藪陰の賢人殿と兵助また窓より老の笑顔、

『ハヽヽ、同胞もない身に幸福な氣の善い甥を持ッたぞ、この伯父に何の用ぢや澁茶でも飲まさうか』

白痴の久藏、うッとりとせし三十面に光輝のない目を剝出しつゝ、的なき背門の方を無心の大手に指さしぬ、

『いや、澁茶よりも祝言酒の用意々々〳〵、今あの稻村で心易い友達に聞けば、こゝの入婿になるは乃公ぢやけな』

『ハヽヽ、祝言には盃事より第一、まづ無うて叶はぬ緣談の媒介といふもの、入るぞよ、ハヽヽヽ』

『その媒介は今こゝへ來る、あの稻村で小林兵助といふ家は何處ぢやと聞た武士を賴もう、こりや面白い』

きくや否、白痴だけは虛言のない事、はッと思ふ折柄、はや門口へ訪づれ來りし武士の聲、

其七十六

背門の墻根越より藪陰の久藏が不意に入婿の催促、幸ひ其の媒介賴むといふ白痴面は呵しけれど、さて身に取て面白からぬ門口へはや、訪づれ來りし現在の武士、兵助、そッと手をもて母子を一室へ押遣りながらわざと訝かし氣に迎ふれば、一僕も召連れぬ身輕なれど、何とやら平生の權柄を包みし三十餘の仔細らしき體、

『近來まで足輕勤務を致した三番組の兵助とやら、や、物いふは初會見ぢやが、をり〳〵城下で顏は見知り居るが、さて今日は內々、ちと尋ねたい事で罷り越した、さしての支障なくば許せよ』

なるほど見れば見覺えのある面體ながら、どこ迄も知らぬ顔の兵助、たゞ慇懃に迎へて座に招じぬ、

『下々の身輕い御奉公いたせしもの、いづれ樣かは存じませねど、歷々の御方が此の、もはや御用のない足輕風情の流れ落ちました片田舍へ、わざ〳〵』

『君側に勤める岡田左内といふ者ぢや、口數を省いて云へばわけて彼の、高倉長衞殿とは幼少より入魂の間柄、勿論其方が父子の身に惡う來たではないぞ、實は兼々、そと漏聞たことのある仔細でのハヽヽ、娘の小夜とやら、無事か、また子を產だ筈、いふまでもない父子の情愛世間の人目は兎も角、定めて其の後をり〳〵江戸よりの內通もあらう、長衞殿、今いづれに居らるゝ』

いづこに御座りますやら、父子もろとも久しい間の御恩を受けました方なれど偖あの御身分を俄に打捨てゝ他國なさるゝほどの事、まして御家來でもない出入ものと下婢風情の娘へ何の御音信が、ハヽヽヽ』

『いや、祕すが人情、その筈なれど、外ならぬ長衞殿の入魂ぢや、第一また其方が娘の小夜に情の種を宿したとやらの風聞、この西田村で子を產落して育て居るとの取沙汰、誰いふとなく城內へ聞えて其事がため君側に御內議もある折柄、こりや古朋輩への芳志この時と思うて、わざ〳〵人しれず來たほどの心體ちやぞ』

『さて〳〵有難き思召、身に餘りましての事なれど、あの後は一切何の御音信もないが事實、また小夜めの妊娠は別に其の、その主ある事、親の身として父なし子を產だ娘の恥辱を祕したさに、つい世間の人目より、事の故障ありげに見えまするかは知らず、さう仰せられましては年來の御恩人へ蔭の仇もて返すやうな父子の身、いかにも立ちませぬ實は近々のうち、

この村より相應の入婿を取らうかと存じますほどの折柄』

『や、それに仕ても本人の長衞殿が居らぬ事、わけて近來、自然に遁れぬ成行とはいへ、重ね重ねの君の御憎味も增して今後いかやうの嚴しい御僉議になるやらいはゞ下世話の坊主の衣まで憎い凡例ぢや、ついては我等の耳へ內々、ちらと漏聞えたは當時この西田村にある高倉の一子を人質に取た上、恩愛の羈絆に引寄せて御成敗になり氣の風聞ぢや、もし眞實その子でなくば今のうち重役衆の手許まで罷り出て、荒々しう呼出されぬ前に申開をするが身のためでがな勿論、さうと聞けば猶更古朋輩の芳志に我等、同道の口添も仕て遣はさう、的に覗はれた後は善惡ともに矢を射らるゝぞ、うかゝ手後れては何の詮もない事ぢや』

其七十七

西田村より城下までは僅に二里、急かずとも半日に往來の道程、まして高倉長右衞門がために竹馬の友といふ、その岡田左內が只一人わざ〳〵尋ね來て、近ごろ城內の取沙汰さては君前の內議も祕さず打明けし上孫を人質に取らるゝ事まで漏らされしのみか、そッと障子の隙より垣間見し娘の小夜がなるほど折々お屋敷へ來られた人との言葉に、兵助、始めて眼前だけは安堵しながら、いよ〳〵斯くと聞けば聞くほど猶更の事、うか〳〵後れては迚も叶はぬ父子の身ぞと、其のまゝ岡田左內の影に隨ひつゝ我が家を立出でぬ、

遲くとも日のあるうちには歸るべき筈、城下へ入りし頃は、やう〳〵まだ晝を過ぎしばかりの折柄、搦手の堀際なる岡田の屋敷へ伴はれて、まづ掛りの重役まで內々そッと申入れし後の事と、其のまゝ玄關脇の一室に待たされながら、さて手の屆いたる茶菓の待遇を受けしが、今か〳〵と首を伸ばせど主人の歸り來る音もなく、召使ひの女どもに聞けば何事も知らぬ顏、留守居の若黨に問へば馬の耳に風、いつしか日は傾いて、はや夕ぐれ近き奥の方に燈火ちら

ちら、はッと今更不審の眉を顰めし頃はびたりと正面の大門を閉ぢられぬ、
や、油斷大敵、娘は孫を抱て村中に力と頼む馴染甲斐もなく我れは此のまゝ出るに出られぬ
捕虜となりて、別れ〳〵に父子が深いところへ落込だかと、老の氣の猶更前後を思へば思ふ
ほど怪訝の雲に包まれ、あるにもあられぬ折柄、いつの間に何處より歸りしか、主人の岡田
左内は奥の室にありとて、取次の下婢に呼込まれぬ、
兵助、ます〳〵訝かりながら、案内に引かれて入れば、夕餐の膳部に山海の美味を聯ねし體
おのれと思ふ心で見るためか、何とやら俄に際立ちし一辯の滿面に物凄き笑を浮べつゝ大盃
をあけて反身のまゝ、ぬッと差出しぬ、
『兵助、まづ飲め、もはや日は暮れたぞ今更急くにも及ぶまい、ゆる〳〵萬事は後刻ぢや』
兵助、おもはず白髪の禿頭を老の膝もろとも進めながら、かくても慇懃の額越に見上げて、

言葉さへ心のまゝには得いはぬ身の哀れさ、
『よく〳〵の不憐な奴と思召せばこそ、歴々の御身分が半日がゝりの御肝煎を下さりました
段、わけて御禮を申上げまする、さて今日の首尾、いかゞ御座りましたやら』
『や、隨分、ぬかりなく氣骨は折て見たれど兵助、叶はぬ事は是非もない、もはや手後れぢ
や』
『えッ、手後れましたとは』
『加之も出る杙が打たれる諺、まづ差當ッての其の方は、此のまゝ我等が許へ確と預かり置
て、雨か風か、後の沙汰を待てとの事ぢや』
あッと驚く兵助の顔、じろりと冷かに見遣りながら、火影に輝く眼光、わざと優しけに細め
て聲まで俄に低く、

『但し兵助、背に腹は代られぬとやら、こゝに一事、眼前の證據なうては申開きが立たぬぞ高倉長衛の一子を産落したといふ取沙汰の娘、あの小夜に至急の婿でも取るか、なれど偖その婿ぢや、今が今、俄に團子細工に作らるゝものでなしこりや幸ひ叶ふた時の方便に不思議の緣と思うて、ちと言出しかぬるが、あらためて、この岡田左内が妾にくれまいか、さすれば誰の子にせい、乳子もろとも屋敷へ引取ッて、實は前々より人知れず我等寵愛の母子と言開いて立抜く事も出來やうぞ、ハヽヽヽ自己が宿した情の種を振捨てゝ逐電する長衛よりは眞實のある男ぢや』

なさけの浮世頭巾、さッと脫いて、酒の香も打消さるゝほどの本音を吹き出しぬ、

其七十八

今か〳〵と歸らぬ老の父を待わびて、草屋の軒深き窓越に城下への通路を見渡せば、さらぬも入り易き冬の日脚、いつしか哀れけに傾いて、人影もなき枯田の野末より、ほッと暮れかかる物淋しさ、近き鎭守の森に塒を急ぐ夕鴉の聲々、遠き山寺の幽かに響く入相の鐘の音、しみ〴〵と憂身の肌に染渡りて、おもはず見返る家のうち猶更引入らるゝ心地して薄闇し、やう〳〵行燈に火を點して、そッと偸むが如く我が子の寢顏を見れば、まだ生れて一年越の日鼻ながらも、誰に似たぞや恨めしの浮世、せめて東の空の夢になりとも通へかしと、また淚に袖の濕り勝なる我が風情主なき今の身には惜からねど二十歲の花も色香も何處へやら、人しれぬ心に亂れし鬢の毛まで壁の火影に悲慘を添て、なさけなや夕餐の箸とる力もなし、まして日のあるうちに歸る筈の父が歸らぬ、今更思へば、わざ〳〵今日あれほどの芳志を輕びに來たとて、會津の城の內も外も敵ばかりの其の人に遁れぬ緣を持ちし父子の身、わけて爭はれぬ血筋の胤を抱かゝへし身の空おそろしく、肌に乳兒の夜路を猶更行かれもせず、村

中に誰一人の馴染甲斐はなし、よしや心易う頼む人ありとも、うかとは打明されぬ事、あゝ何とせむ斯る時こそ平生の神様佛様、我々父子の行末を此の上に願ふではなく、たゞ無事に五歳の曉まで、逢ひたき人に逢うて擧められるまでの間、この幼兒の運を守らせ玉へと涙の目を閉ぢて專念の合掌、あたり寂として藪蔭の水さへ打沒む折しも、軒下の門口へ窺ひ寄る人の足音、

たゞさへ心淋しき憂身の小夜、はッと思はず我が子の寢床に倚添うて、小耳を欹つれば、次第に近く窓の寸隙より内を差覗く氣配、いよ〳〵身を縮めて息を殺せば、そろ〳〵無言のまゝ入口の戸際に手をかけて引開けむとする體、もはや堪らず我を忘れながら起直りぬ、

『誰、どこの人』

聲を聞くや否、がらりと俄に引開けて、ぬッと首を差入れし大男、おもはず飛退て見れば、

えゝ腹立しや白痴の久藏奴、

『入婿ぢや、今日の晝、伯父御に約束して置た入婿ぢや、ハヽヽめでたい祝言の用意は出來たかい』

小夜は只惜氣の泣聲に顏を反けて、見返りもせぬ眞白の首筋襟脚を、ほれ〳〵と火影に見恍れし久藏、一時に絞殺さるゝが如き聲を振出しぬ、

『や、これぢや、村の衆がいふたぞ、この乃公には定めて嬉し泣する筈と、ハヽヽこれぢやわい』

まだ知らねど父は兼ねてより横戀慕の岡田左内が人質に捕られ、現在の今その身は白痴者の一心に見込まれて、あはれ朝夕の束の間も忘れぬ人の面影には浮世の關と山川に隔だてられし二年越、思へば何處に身の立つ淵もなく心の遣る瀬もなし、

其七十九

さらぬも遣瀬なき憂身に打沈みし折柄、藪蚊にさへ劣りし藪蔭の久藏に驚かされて、口惜し さ、腹立しさ、恨めしさ、悲しさ、泣くにも泣かれぬ程の無念さに、もしこれが人らしき奴ならば、もし今こゝに大切の乳子さへなくば、たとひ世間を憚りし假寢の夢にもせよ、四十萬石の會津に誰あらう粒選の武夫といはれし其の人を男に持ちてよく〳〵の緣あればこそ情の種まで宿せし小夜、おのれやれ、おめ〳〵無事に置くものかと思へども、さて何とせむ現在の相手は心の脫殼に等しい白痴の村名物、たど我が身の不運と諦めて、物もいはず睨みしまゝの顏を反けぬ、

されど世の諺に白痴の一念、父は居らず四邊に人はなし、夜は更けたり、おろかの思情に餘りて何をするやら知ぬ奴とまた俄に怖ろしく、總に覗はれし蛙の心地、そッと思はず横目に見返れば、頻に兩掌を合して我が身の後姿を伏拜む體、また哀れに呵しく、さりとて憎らしい奴、

『これ久藏殿、もう夜が更けたぞや、いつまで其處に居られては、それ〳〵忘れた事、今夜は大地震のあるとやら、うか〳〵すると生命がない筈』

何事も生命とさへ言へば、豪て噂の臆病白痴、あッと驚いて遁去る筈の奴が、いかにせしか今夜ばかりは五體そのまゝ、のツしりと地より生へたる如く、動かばこそ、

『大地震、こりや面白い、こゝで此のまゝ夫婦の俱死ぢや』

『夫婦、誰の事、夫婦とは』

『おぬしと乃公ぢや』

『ホ、ヽ、どこの誰が何と敎へても、其のやうな事いはぬもの、子があるぞへ、他の子を持

た母親の身へ貴方、ホヽヽもし外に美い女あれば妾が世話して進ぜる、第一あの伯父の不在に貴方一人、こゝに居ては、その美い女も氣を置て來ぬやうになる筈』

『や、外の美い女も入らぬ、その伯父御ぢや、伯父御に約束の濟だ上は乃公のもの、じたい伯父御はどこへ』

『お城下まで』

『城下、あの城下か、城下まで行かう、二里か三里、ハヽヽ一氣奔走ぢや』

いかに追へばとて拂へばとて、耳にも入れぬ白痴の一念、幸ひ城下まで、一氣奔走といふ、その愚かさを身のために使うては濟まぬ事ながら、たれを力に草の葉の由緣もない涙の折柄もしや父の安否を知る方便にならうかと、ならぬを覺悟の上の萬一に、おもはず小膝を向直して俄の笑顏、

『のう久藏殿、いかな約束あるやら、それ知らねど、さほど伯父に逢ひたくば城下まで、あの城下の御武家に岡田左内忘れまいぞ、岡田左内といふ人の内に居る筈、また逢へば伯父より何とか貴方への傳言もあらうぞ、岡田ぢや、忘れまい左内といふ人、たづねて見や、町人小者と違うて知れる筈の人』

白痴の久藏、足の裏を針もて刺さるゝ如く頻に飛上り跳上りて其のまゝ駈出せしが、また俄に立戻るや否、

『岡田、左内、岡田左内、岡左ぢや、岡左ぢや』

また忽ち身を飜へして、闇に打出す鐵砲玉の如し、

其八十

城の櫓より鳴響く諸士交代の朝太鼓に、はや出仕の衣服を整へし岡田左内、ゆふべ一夜を閉

籠め置きし兵助を呼出しぬ、

『兵助、あれほど理解を説て聞かせた以上、もはや今朝、あらためての言葉もない、ありのまゝ御前に申上げて、これこそ長衛が一子と差出さば重ね〴〵、御憫味のかゝりし折柄、ハヽヽ如何ならうぞ、ハヽヽ、但し花は時の風、人は世に連れての運命、もし身の安穏を願はば兵助あの小夜を我が手許へ差置け、いはゞ禍災を轉ずる僥倖ぢや』

手を取て橋を渡さるゝかと思ひの外、欺き寄せて陥穽へ蹴込まれしが如く、終夜の無念に老の涙を絞りし兵助、今また絶體絶命の急所に針を刺さるゝ心地しながら、かくても孫のため娘のため、あはれや餓て餌を乞ふ猿に似たりと、

『身に餘りましての思召ながら、さて事の内實は、昨夜も段々お歎き申上げまする通りの次第、娘は高倉様へ御奉公の砌渡り仲間の素性も得しれぬ男に唆かされて、實は其奴の種、心

外には存じましたれど、産落せば孫、生埋にも致されずまた西田村への後は、それに懲果て た親心、二度の過失ないうちにと、はや入婿の相手も取り極めましたほどの女』、

『兵助、ハヽヽ、高倉とは朋輩の間柄ぢや、をり〳〵往來して、あの小女が渡り奉公の仲間に唆かされたか、但し無妻の主人に人しれず内々の情をうけたか、その邊の事を其方の口車に運ばるゝ岡田左内でないぞ、また今、西田村で取極めたといふ、その婿は娘の婿でなく我れへの婿、當座の楯に取た久藏といふ奴でがなハヽヽ、その久藏め今朝、こゝへ來て居るぞ引止め置た、用ばしあらば逢はして遣はさう』

『や、久藏、あの久藏』

『今朝、門の開くを待て、不意に入婿ぢやと飛込だ奴、ひッ捕へて見れば、何の事、ハヽヽ、ありや性根の失せた脫殻の白痴ぢや、二度の過失ないうちの父心として、わざ〳〵あの白

痴を縛に取るとは面白い、ハヽヽヽもはや出仕の時刻ぢや此の上に舌も耳もない、ありのまゝ委細かくと言上するばかりの事』

ぬッと音もなく起上りながら、衣紋を整へて冷かに見下したる半眼の面相、おのれ鬼畜奴、武士にあるまじき卑怯の大がたり奴幸ひの脚首を引倒して咽喉笛を絞めてくれむと思へども聞及ぶ横紙破りの怖ろしき城主を楯に取る奴、悲しや我れは藪蔭の蟲にも劣る白痴の久藏を當座の楯に取りし身加之も其の久藏まで現在の手に摑まれたる今更、もはや叶はぬ運命の瀬戸際、別れ別れに無念の憂目を見るよりは、せめて父子もろとも抱合うて如何なる涙の淵瀬にも身を沈めむと、おもはず老の兩眼を閉ぢたるまゝに苦しけの泣聲、

『娘、兎も角も立歸りまして、小夜めに、逢ひましたる上』

『いや、待て、歸るに及ばぬ、その小夜も實は今朝、迎ひに遣はしたぞ、今に來る筈ぢや』

『や、娘もこれへ』

『ハヽヽヽ實は改めて長衛の敵手に選ばれた岡田左内、小面倒なる太刀打は偖置き、まづ一工夫の智恵袋に押込で見る氣ぢや、ハヽヽヽ』

其八十一

父を阯に呼寄せらるゝとは知らず、乳兒を抱へて情義の駕籠に迎へらるゝ心地、やう〳〵來て見れば思ひの外の鬼の宿、もはや此奴に用なしと白痴の久藏ばかりを叩き出して、父子もろとも其のまゝ一室の座敷牢へ閉籠められぬ、

たゞさへ無念の涙に戰く老の拳を握り詰めし兵助、かくと聞くや否、あまりの口惜しさに前後を忘れて泣伏せし小夜、暫時は互ひに物も得いはず無言のまゝに手を取合へば、出るにも出られぬ今この敵中に悲慘いかなる夢や見る、すや〳〵と膝に睡りながら無心の笑渦を浮べ

し幼兒の寢顏、いとど猶更腸を捩られぬ、

『父樣、妾は、もはや身の末、こゝまで深いところへ落された妾は、どうならうとも、せめて、只この子ばかりは、助けたい、たとひ捨子にするとも江戸の空、この會津で、このやうな犬武士の手にかけられて、もし萬一の事あッては猶更、生きても死ンでも父樣、この小夜は立ちませぬ、申譯がない』

『や、無念とも、心外とも、さて〳〵根深う、謀られたぞ』

『もうかう謀られた上は、今更、迚も叶はぬ事、たゞ妾の身一個で濟ましたい、この犬畜生に押へられて、とのやうな憂目、つらい目、なさけない、身動きのならぬ淺ましい目に逢うても、かうなる身の因果と諦めた妾は、私の身で濟む事、せめて和子だけは、屆けたい、產だゞけを手柄にして、無事に、お手許へ渡したい、妾を犧牲にして、この子の助かる工夫して下され』

『いや、白髮の禿頭まで武家奉公して、足輕風情より一寸の出世も得せぬ果が、やう〳〵片田舍へ落込で露命を繫ぐ父ながら、まだ犬畜生の餌食に娘を、わけて子のある娘を、おめおめ喰はれたまょ成佛する男でない』

『なれど父樣、この妾が、覘らはれた妾の身を餌食にせいでは』

『同じ餌食になるなら現在、この鬼畜に取て押へて生身を汚されるよりも、遁れるだけは遁れて見た上の運命、その場の成行に喰はれて死ね、纖弱い女と乳兒のあるに油斷して表門と裏門の外、さのみの用心もない今夜の寢息を、おのれやれ、もはや絕體絕命ぢや、この父は一步あとに居殘ッて、するだけの事して退ける間に其の、その子を抱て塀一重、もし叶はねば幸ひ堀端の屋敷、まして搦手は音に聞えた底しらずに不斷の水を堰込だ大濠ぢや、母人も

ろとも飛込ンで死ね、情を宿した女に取返しのならぬ生恥を曝さしてまで我が子に逢ひたいとは言はれぬ筈の御人ぢや』

『父様、それ、それぢや、それこそ父様かうなッた中での本望、この上は筆、生命よりも筆と硯が欲しい』

『何、筆と硯』

『この會津の堀ぢや、木の端へでも書きたい、浮び上る死骸に、高倉、長右衛門の妻、小夜一子長太郎と書た木札を付けて浮びたい』

父の兵助、おもはず老の兩眼より骨身を絞り出す男泣の涙、ほろ〳〵と流して打伏しぬ、

其八十二

その日の夕暮、岡田左内の歸るを待ちうけて、わざと兵助、自己より進み出でつゝ、心の一物、今夜の事、顏色にも現さぬ老の笑顏、

『や、何事も世に後れた老耄の昔氣質とは違ひ、内々そッと思召のほどを申聞けましたるところ、さて〳〵今時の若い身空は世に連れて氣心の打解けた滑かさ、案外さのみの、ハヽヽハなれどまた何とやら、流石に子までである身として父の手前、飛付くやうにも言兼ねまして か、せめて今夜一夜だけの御猶豫を願うてくれとの事、いや、うか〳〵致せば父が子に理解を說かれまするほどの世の中、結句お目觸りの種あの孫さへ御僉議なう、無事に下さりますれば此のまゝ娘を差置て西田村へ逝歸りたい兵助奴、自己ばかりが得意顏に昨夜よりの頑愚さ、今更ら面目も無う心得まする』

禿頭の額口、あるか無きかは知らねど汗を拭て差俯けば、岡田左内、さもあるべき筈との大面に天井を打仰いで、小膝を打ちながらの高笑、

『ハ、、、、何物の種にせい、やう〳〵まだ莟の花と思ひの外、父なし子を産出すほどの小夜奴ぢや、ハ、、、、實は高倉の屋敷で三四度、ちらと見て以來の執心、念が屆いたか、緣があッてか、但し當分は妾ながら、去年、妻を失ふた我が手許へ自然に芽を吹出す彼れが身の幸運でがな、兎も角も兵助、もはや浮世に用のない白髪頭を振立てょ出る場合でないぞハ、、、、君前は當時出頭の岡田左內が手にある事、ゆる〳〵今夜は休息せい』

もはや玉を掌中に握りし顏色、おのれが物となれば氣も心も急かぬ體、わざと今更ら惰らしく今夜の事とは言はず、其まょ無言の笑を殘して奥へ入りし後姿、兵助、じろりと老の額越に見送りぬ、

やがて持運ばるょ夕餐の膳部を見れば、俄に打て變りし山海の美味、加之も夜具まで行屆いたる襟元の厚さに猶更ら心愕く、箸とるさへ汚はしさ無念さの涙を絞りて、父子いよ〳〵一室の顏と顏、互ひに見合せながら、更行くまょの夜と共に我身の運命、次第に迫り來る生死の境を人しれぬ心の底に待受けぬ、

城の櫓に響く夜半の太鼓、屋敷町を過行く火の用心の拍子木わけて深け易き武家の內外、ひッそりとして、庭の樹間を誘ふ風の音のみ身に染渡れば、はや何處も夢にや入りし燈火の影に、兵助、わざと宵寢の枕を欹てょ聲を潛めぬ、

『小夜、用意ぢや』

すや〳〵睡る幼兒の乳房、そッと放して、天生の美女は猶更ら一念に物凄き目色、四邊を見廻しながら、流石の心に亂るょ鬢の毛を涙の片手に搔上げぬ、

『父樣、もはや怖ろしいものはない、どこまでも高倉長右衞門の妻ぢや』

愚かの目にも花は花、まして三十の暁まで藪蔭の久藏といへば人間の捨物、村外れの墓原に棲む牝犬にさへ尾坪を振られし事なき男が、その花の宿へ自己ばかり朝夕の心易氣にせられしのみか、その花の入婿を自己とのみ心得たる白痴の一念脇目も觸らず祝言の盃を急いで、城下の夜明に岡田左内が屋敷へ飛込みし甲斐もなく、もはや父子もろとも手に入れし上は此奴に用なしと叩き出されて、いよ〳〵募る白痴の一念に前後無差別の怨恨、ほッと五體は宙に吊らるゝ心地、こゝの主人が我女房を盜ンだ奴ぞと思ひ込みぬ、

叩き出さるゝや否、西田村に馳歸ッて例の藪蔭に一日の身を横へながら、白痴の底より絞り出したる念力、猶更怖ろしく其夜また城下へ駈込ンで、おのれと思ふ一心の四方を去りも得やらず、岡田左内が屋敷の外を闇の夜露に打たれて、彼方に潛み此方に忍びつゝ、ふけゆく夜半の過ぎし頃、智慧は足らねど怨恨に餘る用意の工夫、おのが肌に卷付けたる藥束を取出して小脇に掻込みしまゝ、差出でし松が枝に猿の如く飛付いて塀の内へ傳へ降りぬ、

かくとも知らぬ屋敷の一室には、今しも運命に身を任せし生死の境、小夜は睡れる我が子の泣聲立てさせじと乳房を含ませしまゝ肌に抱入れて、その上より高く胸帶を卷付けながら裾をからげて人しれぬ夜の嵐に花一輪の散際、兵助は老の生命の捨どころ今この時と、おのれが肩馬に塀を乘越させ、もし叶はずば我のみ後に武者振付て追手を附ぐ間に、あはれ娘は孫もろとも身を躍らして堀へ眞逆樣の覺悟、これぞ父子一世の死別になるかと、おもはず涙の目と目に互ひの顏の見終焉、總身の溜息に燈火、ふッと吹消しぬ、

一室を隔てし若黨二人の寢息に耳を澄しながら、父の兵助、まづ障子一重の關を無事に音なく這出でつゝ、かねて見覺え置きし緣端の雨戸一枚、内より拔外す掛釘は易けれど、閾に水を流して兩手の力に蠖蟻の餌を運ぶが如く、そろり〳〵と一尺あまり引開けて後、首さし出

して庭前を見れば、折しも師走二日の更渡りし闇を縫うて、ふしぎや主人が居室の縁下より朦朧氣に白く立昇るもの、やがて次第に濃く太く四邊の樹間を照して、いつしか薄赤くなり行きしかと思へば、ぽッと一時に根本より火の氣を吹出しぬ、

兵助、おもはず聲を立てむとせしが、そのまゝ大息ぐッと呑込で這戻りつゝ、今しも一室を探り出むとする娘の耳に口、

『火事ぢや、火事ぢや』

小夜は父の兩手に確と取付て、うち震ふ涙の忍び聲、

『火事、その火事は神樣、佛樣』

其八十四

城の櫓さへ睡りて寂寞たる塚手の堀端、岡田左内が屋敷の前後より師走二日の夜更け人定まりて後、ぽッと一時に闇を破りし二箇所の火の手、

加之も其一手は厨の入口より、夢の半の寢恍面に黑煙を吹込まれて、召使の男女、あッと咽びながら狼狽へ騷ぎて生命からゞ〳〵門を八文字に押開いて遁出すや否、その一手は主人が打臥したる居室の緣下より不意に燃上りて、前後も得しらぬ大醉の枕頭へ火の粉の雨を注ぎしかば、片鬢を燒かれたる襯衣の儘飛込來る若黨に助けられて、やう〳〵門外へ駈出でし頃は、滿天の闇を照して渦卷く火焰の凄じき勢ひ、はや兩隣りの屋敷も吐出す火焰の舌端に舐めつゝ上を下へと立騷いで、いつしか城中より繰出せし火事纏は見付の門際に人馬の警固、會津城下は時ならぬ混亂に鼎の沸くが如し、

さらぬも生死の境を遁れ出でむとて、宵より殘る方なき身の支度に一念の血眼を見張し父子、兵助は固り小夜は猶更、燃上る火の手を思はぬ佛神の加護と伏拜みながら煙に包まれ混雜に

紛れて轉び出づるや否、西田村の方角へは走れぬ身、其のまゝ城下の裏道傳ひ、加之も街道筋を外れし曉方の山越に屆かぬ江戸の空を仰いで、籠の鳥の雲井に放たれしが如し、きれ〴〵の息に物も得いはず、肌に泣く子を卷付けし胸帶の上を兩手に確と抱へながら、裾を高く徒跣のまゝに髮ふり亂して、馴れぬ坂路の笹原を父の手に取縋りつゝ一里ばかりの後、冬枯の樹間より殘る煙の白く絕え〴〵に消えし横雲を見返りて、ほッと思はず其のまゝ大地に坐せば、兵助も胸を撫下して娘が懷中の孫を差覗きぬ、

『やれ生命は拾ふた、過失か放火か知らねど、こりや夢ぢやさて〳〵思ひがけない案外の儌倖、同じ火事でも白晝ならば迚もの事、幸ひ草木も眠る夜半の不意に燃上ればこそ、あれほどの中を、や、この分では孫の行末、氣を落すな、猶更以て運があるぞよ』

『よく〳〵の氏神樣、その運を力に此の上お願ひ申して、怪我のないやう、たとひ道中は人の軒に立たうとも父樣、此のまゝ江戸へ』

『もはや會津節には居られぬ身、いかにも江戸ぢや、江戸の外に父子の立瀨も浮ぶ瀨もない』

『どこに御座らうとも、搜し當ていでか父樣、まして證據のある御顏、よしや廣い江戸の市中、面深い笠を召されても妾には一目、ちらと御姿の知れる筈』

さても九死一生、叶はぬ父子の生命、やう〳〵こゝまで脫れしが、あはれや岡田左內の屋敷の燒跡に白痴の久藏が死骸、まツ黒になりて橫はりぬ、

其八十五

岡田左內、自己が屋敷の燒跡に白痴の久藏、死骸の橫はりしを見るや否、はッと思ひしが、その黒焦の死骸よりも猶更生きて腹黒き小人の常、重役の僉議も待たで近來の出頭を幸ひ時も移さず君前に罷り出で諺にいふ油を薪へ注ぎし言上、

『昨夜の火元は左内奴、いかやうの御咎を蒙りますとも、はゞ、但し其の以前そと申上げい、で濟まざる儀は、猶更以て左内奴の油斷、恐れながら、兼て御内意を伺ひし上、人しれず屋敷へ召捕へ置きましたる高倉長衞の隱し妻、竝に其の父と其の一子、あの火災に紛れて遁失せし燒跡に正しく彼等が仕業と心得ましたる證據、ありく〳〵』

きくや否、さらぬも猛氣一徹の城主明成、妻まじき眼中に光輝を添へて、はや事の是非曲直もなし、

『せめて形式を備へた妻子でもある事か日蔭の草葉に祕し置かれて婢妾の分際として脛腰も拔けず、おのれ城下の武家屋敷を六軒まで燒立てゝ其のまゝ遁失せしとは、や、いかにも大膽なる奴、かくと聞かば猶更不敵の横手を拍て、その婢妾を手柄顏に待ち受くる長衞奴の面相、日に見ゆるぞッ』

岡田左內、こよぞと膝を進めて、いよ〳〵額越の聲潛めぬ、

『まこと君の御威勢を恐れての浪々ならば、こゝ兩三年は謹ンで江戸表徘徊の儀を差控ふべき筈、さるを度々の御討手これ面白氣に引受けて憚る體もなう、己れが太刀風に任して得意貌に働くほどの奴、いかにも御意の如く、あの放火女を手柄者と心得、あらためて本妻に立直せし上、靑天白日の下に夫婦折揃うて會津四十萬石の御敵ぞと言擧ねまじき奴等、申さば御不興の御顏を眞正面より心地よげに睨み返す程の奴等、もはや此の儘には捨置けぬ横道者かと心得まするゝ』

『や、重ねく〳〵の奴、言語に絕た今昔無類の曲物、いかな手を盡しても、うぬッ、召捕らいでか、武門の瑕瑾ぢや』

『はゝ、つきましては可惜ら御人數、むざく〳〵彼奴が手に御失ひ遊ばさるゝよりは幸ひの左內

奴、まづ兎も角も昨夜の火元として閉門謹慎を仰せ付けられたく、實はその、その閉門中に内々の御免を蒙りそッと浪人の體にて江戸表へ出奔の上、つまりは敵と同じ流れの末に落込みし後の一工夫』

『ムヽ、彼奴の懐中へ身を投込で、事を仕て退けるとか』

『は、いかにも心外ながら、さて不思議の業に長けて運に叶ふた奴、なみ〳〵の太刀打にては迚もの奴、一命の有無は置て、もし此の上に仕損ぜば猶更御威勢を汚すのみの事、もはや敵と同じ身に抱合うて急所を刺すより外、ないかのやうに心得まする』

『や、それ面白いぞ、憎さも憎し、あまり憎さに武道の仕手扱かひは盡きた奴、死後の怨恨を残すほどの底深い術にかけて取らば猶更の一興ぢや、ぬかるな、みごと仕て來い』

其八十六

雪氣を帯びし冬空に猶更響く坂東太郎の激流、その河原の渡場に日は暮れて、もはや船呼ぶ旅人の聲もなく、殘る篝火ちら〳〵と北風に靡く物凄さ、街道馬の鈴の音まで凍るかと思はるゝ寒さに追込まれて、こゝを幸手の宿に落合ひし旅籠屋の軒端のみ、俄に織るが如く賑ひぬ、

江戸より奥州街道への旅の空、その日を幸手に行暮れて同じ旅路の夢を結び合ふ中に例の岡田左内、わざと目立たぬ浪人體の身輕に人より早く宿を取りぬ、されど本國に身を置兼ねし浪々でなく、また前途に立瀬のなき落人の浪々でなく、わけて何處を的との定めなく尾羽うち枯せし旅の空でなく、實は主君が心の薪に自己が利慾の油を注ぎかけて、首尾よくば元來の六百石に千石の空高を取ッて占めむとの内心、加之も人しれぬ横戀慕の執念深く、いづれ馬駕に本街道を急ぐ我れよりは老輩と足弱が乳兒を抱へて山越の

間道を迷ひ行く難所の日数、先駈けて江戸の入口に網を張れば遁さぬ筈との一物、そッと胸に疊みながら、襖一重の隣席に混合ふ今宵の宿の人聲を餘所に聞捨てつゝ、おのれは八疊の中央に大胡坐を掻て先陣の顔色、頻に夕餐の獨酌を傾けぬ、

折しも宿の亭主が揉手の額を入口の閾際に叩き付けて、かゝる一時の混雜は近來にない事、恐れながら片隅へ身分よろしきもの四五人の合宿をと乞へば、さらぬも次第の醉に連れて元來の酒癖、隣席の騒がしき聲を猶更の耳に立てし岡田左内朦朧たる醉眼を見開いて振返りぬ、

『ならぬぞ、一夜たりとも武士が休息の臥房ぢや、もし俄の人混に自然の物價高直とあらば、倍增の宿錢を投出すともうろ〳〵狼狽て野宿を仕損ねた奴とも、今更人がましう我が枕頭へ合宿とは言語道斷の沙汰、まかりならぬ、退れ退れッ』

一喝の下に睨まれて其のまゝ逃出せば、襖を隔てゝ我れこそと立聞の三四人、おもはず舌鼓を打鳴しぬ、

『旅は道伴れ世は情とさへいふに、狼狽た野宿ものとは此の家臺骨を三年前に一人で買占めたやうな大口ぢや、武士が宿錢の倍增なら町人も三倍五倍、腰の刀が重いか胴卷の金が重いか、ハヽヽヽヽ』

手を拍て笑ふ聲の耳に入るや否、岡田左内ぐツと片膝を立てゝ一刀引寄せぬ、

『や、そこな素町人ども、これへ出い、おのれ今、何と吐した、他の事は扨置、腰の刀が重いか胴卷の金が重いかとは面白いぞ、たしかに聞たぞ、但し面白う聞たのみでは興がない、幸ひ一人旅の徒然ぢや』

會津なまりの大男、のそりと立上りし足音に、浮世は生命の物種、さて口ほどでもない町人ども、あッと驚いて俄に逃出せし廊下口を、いよ〳〵酒興に入りし岡田左内、待てとの大喝

一聲、其のまゝ追行かむとせし前面より遁出る人混を掻分けて悠々と入來りし旅姿を見れば、

や、高倉長右衞門、

其八十七

元來の酒癖に大喝一聲、あッと驚いて逃行く町人どもを廊下口まで追行きし眼前に、その人混を掻分けて入來りしは高倉長右衞門、柄袋かけたる大小に編笠片手の旅姿、もの凄果てゝ、化損ねたる狸の如く目ばかり剝出しぬ、

『や、高、高倉殿、長衞殿か』

いづこの里にも瀬にも悠々たる高倉長右衞門、き太刀疵の顏面に微笑を浮べながら其のまゝ立停りて音太き聲、

『やれ珍らしいぞ岡田殿、さて何が興に入られてやら、この人數を相手の兒戲、旅なればこそ、ハヽヽヽ、實は今、やう〳〵亭主を口說て無理往生に宿り込だ長衞ぞや、どこも溢れて空室は無いゆの折柄、こりや幸ひの驛染甲斐に一夜の合宿御無心いたさう、また一別以來その後の本國沙汰も承りたい、ハヽヽヽ』

わざ〳〵この高倉を覗うて人知れぬ江戸への旅路なれど、現在その高倉と今この旅路の合宿に出遇はむとは、夢よりも案外の岡田左内、おもはず敵に逆寄せられし心地しながら、さて今更顏色にも出せぬ苦笑、

『一人旅の徒然、せめて隣席の町人どもを酒の相手に致さうとて、ハヽヽヽ、まづ我等が座敷へ、久々の物語、實は內々そと江戸表への道中、いづれ御浪宅を伺はむと存じた折柄ぢや』

やれ安心と俄に雁首を揃へて振返りし町人どもの小面、いよ〳〵目に入りて憎けれど眼前に隔てし高倉の手前、もはや再び追行く足も蹈出されず、其のまゝ自己が座敷へ伴ひぬ、

岡田左内、心の底の一物、そッと猶更深く押秘しながら、わざと昔を忘れぬ友朋輩の馴々し氣に打解けし體、

『さて高倉殿、その後の御健勝は何より以ての重疊、また我等が口より申すは、聊か異な事のやうに聞えも致さうが、度々の仕手を、いち〳〵物の見事に、君前は兎も角、わけて幼少より親しい身には蔭ながら、や、天晴れ、貴方なればこそぢや、但し此の、この年の暮に向うて、いづれへの旅行ぞ、奥州街道とは申せ、まさかに會津へは』

長右衞門、おもはず心苦し氣に差俯きしがやう〳〵振上げし眼に左内の面上、じろりと見詰めながら容を正しぬ、

『およそ太平の今日、武士として長衞ほどの不運もの、また世にあるまいかと存ずる、何が面白さに、いづこの誰へ手柄顔に、いはど同じ淵瀬に生育ッた人々を三人五人まで打續けて

や、いかにも濟まざる事ぢや、重ね〴〵、かやうな敵をうけて働かうため、修行いたした業でもないに偖、その場となれば退くに退かれぬ意氣地の太刀打、是非もない事、但し打果した人々への申譯は、以上いづれも其人と知れど我より踏込での鋒鉾、さらに一度の覺えも無し、また本國退轉の浪人この身ばかりでも無いに、いかなれば長衞たど一人、かくまで深う君の御憎味を蒙るやら、實は一命かけて其の儀を、伺はうための道中』

『や、本國へ、會津へ、

『いかにも、虎子を得るの希望なくて、たど虎穴に入る哀れの高倉長右衞門、されど萬一、もし思召を伺ひ得ずば、わざ〳〵江戸の空にて今後また二人三人づつの仕手を引受るも面倒恐れながら御城下にて御意に叶ふまでの敵を一時に引受け、この長衞がため會津の人種、どれほどの御損になるか、骨ある男が生涯一期の働き振を御覽に入れむとの覺悟』

きくや否、岡田左内、あツと呆れて思はず身を縮めぬ、

其八十八

無事に立退きし身さへ浪人となりし上は、もはや再び本國舊主の城下へは萬一を恐れて宵闇の星影も憚るべきに、君が憤怒の太刀疵ありく〳〵と白晝の面上に曝すのみか、加之も其後の討手を悉く打果して猶更深き怨恨を浴びし身が、寸隙もなき滿目の敵中に向うて只一人、悠悠たる五體を投ぜむとする高倉長右衛門が振舞に、岡田左内、たゞ呆れて其の顏を打守りぬ加之も今後また二人三人づつの小面倒なる討手を江戸の空にて引受けむよりは、我れより押掛けて會津の人種どれほどの御損になるか、恐れながら御城下にて生涯一期の太刀音を御耳に入れむがためとは、大膽にも大膽、不敵も不敵、あまりの大膽不敵に岡田左内いよ〳〵恐れて言句なし、

されど元來この高倉が首を慾か武道の業に得むとすればこそこれまでの討手いづれも野草の如く苅盡されし大敵ながら、いかな大敵も神ならぬ身の油斷はあるべき筈、その油斷を覗うて人間一期の急所こゝぞと思ふ術に引落せば何の苦もなし、加之も幸ひの今この合宿で出逢ひしは天の賜物、會津第一の手柄と千石の褒美は正しく我が鼻頭に振吊いたりと、竹馬の友朋輩よりも眼前の利慾に膝を進めし岡田左内、わざと四邊を見返りながらの聲を潛めぬ、

『や、理も非もない當世風、たゞ自己が一身の浮世沙汰に追從輕薄の徒輩は知らず、まことに武士骨に生れついた貴方の男振としては、今日の進退いかにも斯くあるべき筈、實は我等も俄の御不興を蒙りもはや浪人いたした折柄』

『ム、浪人、わけて御意に叶ふた出頭の御身が、俄の浪人とは』

『それも浪人すべきだけの仔細あらば兎も角、さて夢よりも案外の事、夜盜の業でがな、屋

敷に放火せられて兩隣へ燒移りしがため、いはど閉門謹愼で濟むべき筈を、例の荒々しき御無體、父祖傳來の知行も筋目も一時に召上げられて生涯の御勘當』

『やれ御勘當流行ぢや、なれど長衞とは違ひ、面上無事に御憤怒の極印も無い上は、また討手を差向けられるほどの御憎味も無い筈、たど當座の御不興その燒跡に屋敷の建直る頃、いづれ御召還しの御意もあらうぞ、同じ浪人せられても會津の空を振返ツて御無體などとは勿體ない事』

『いや、これ幸ひと申されぬ身ながら、もはや斯くの心體、たとひ倍增の御加恩を蒙るとも生涯また再び會津へは歸參を願はぬ覺悟、よし舊知の十分一たりとも此の後、奉公甲斐のあるべき君を見立てゝ仕官するか、但し飢餓に迫らぬ世渡りの道さへあらば浪人の境涯こそと實は貴方の御力を借らうため江戸への途中、この幸手にて思はぬ合宿いたすとは、よく〳〵の御緣ぢや、さらぬだに幼少よりの友朋輩、まして今は同じ流れの末』

『手を引合うて世に出る道ならば偖、いはれずともの事、同じ境涯に落ちた友を捨てゝ一歩お先へまゐる長衞ではないが何とせむ、今この流れの末と同じ身になられては生命と壁一重ぢや、ハヽヽヽそこまでの深き御勘當を受けたではなし可惜武士一人、うかと不忠の捨物にせられまいぞ、この長衞は長衞、お身として斯く際立し振舞は入らぬ事、たど久々の面會が何よりの喜悅、わけて互に旅路の徒然ぢや、いざ枕を竝べて罪も報いもない往昔を寢物語に致さうハヽヽヽ』

其八十九

腕節にては大地に根を持つ磐石を押すが如く、迚も叶はぬ剛敵の高倉と思へば、滑かなる舌端の口車に乘せて謀策の穴へ引落さむとすれど、その後の會津臭きものには一切の用心深き

體、幼少よりの友朋輩として加之も今は同じ流れの浪人になりしといふ我にさへ、何とやら油斷なき面魂と見抜きし岡田左内、せめて今夜の合宿を幸ひ旅寢の勞れに枕を竝べて眞夜中の夢を、人しれず這ひ寄ッて刺し通すより外に術もなしと思ひ込みぬ、

まして今この時機を外しては、いかに不敵の男とて會津の空へ唯一人は飛ンで火に入る夏蟲の諺、むざ〳〵と可惜ら獲物を他手に渡して鼻先の千石を取遁すのみか、もし萬一あの小夜奴に出逢はゞ事の破滅、さらぬだに怖ろしき此奴の血眼に仇敵と覘はるゝ我れ、いづれにせよ今夜のうちに仕止めずば却て禍の基、もはや後日の再會には神算鬼謀も何の用なしと岡田左内、いよ〳〵心の底の白刃を磨出しぬ、

かくと知るや知らずや、高倉長右衞門、身を横へて枕に就けば、寢物語の應答も半は既に朧けの夢心地、襖一重の隣室に混合ひし例の町人どもが諸國の浮世沙汰に大聲の高笑ひも、いつしか次第に靜りつゝ、たゞ四邊に響く旅寢の鼾聲のみ、耳立つほど猶更更行く夜半に物淋し、

岡田左内、そッと枕を欹てゝ長右衞門の寢顏を窺へば、燈火の影に縫へるが如き太刀疵の面體、また今更に凄けれど、すや〳〵と睡れる石佛の體を見定めつゝ鎌首を擡げて、わざと中音の聲、

『高倉殿、長衞殿』

再び三たび呼べども更に何の返答なし、さらば今この刹那と夜具の中より音なき半身を這出して、盜むが如く枕頭の脇差を引寄せながら、やう〳〵疊一枚を横に隔てし夢うつゝの敵もはや鬼神も手のうち、たゞ一刺と思ふや否、長右衞門、ぱちりと目を見開いて眉を顰めしまの冷かなる微笑、

『今ごろ長衛を呼起して何の用、ハヽヽヽ厠への道伴に誘はれたか』

はッと狼狽て返す言葉もなく、思はず身を縮めて其のまゝ元の夜具に入れば、長右衛門、また其のまゝの無言の眼を閉ぢながら其處にあるかともいはぬ顔色、重ねて不審の半眼も見開かで、うと〳〵と睡る體に猶更荒膽を取潰されし岡田左内、今は却ッて自己の寢首、いつ何時に攫まるゝやら知れざる心地、

加之も其の後、くるりと枕を仕變て我れへの後向に寢入りし大膽さ不敵さ、ます〳〵薄氣味わるく、みれば目鼻もなき只一個の首筋元へ催か三尺の間隔、ぬき打の手を伸せば何の苦もなく屆くべき筈ながら、寢息と共に動くが如き肩口の怖ろしさに、おめ〳〵と終夜身を縮めて其のまゝ打守りしがいつしか東天の空を告げ渡る曉鴉の聲、やがて朝霜の小室節に追はる街道馬の鈴の音ちやら〳〵、

わけて俄に騷がしき隣室の町人ども、はや起出でて手を打鳴らしつゝ旅路を急ぐ朝餐の催促に、長右衛門、おもはず眼を覺せしが、猶そのまゝに振向きもせで寢ながらの聲、

『岡田殿、もはや夜が明けたぞ、但し前夜、ふしぎに異な夢を見た、いづこの奴か生命しらずの大白痴め、敵手も敵手おのれが分相應の力に及ぶ敵手でもある事か、この高倉長衛が寢息を窺うて、ハヽヽなれど盲蛇の鎌首を擡げしのみの業ぢや、手も得出さいで竟に其のまゝに居縮ンだは結句覘はれた我れよりも覘ふた其奴の僥倖、もし這寄らば夢なりとも其奴、取ッて押へて、胴骨を踏碎いて今朝の汁の實に仕てくれむもの、さて惜い間際に夢が覺めて、また其のまゝに寢込ンだぞ、ハヽヽヽ』

岡田左内、膽魂を串指にせられし顏色、今朝この高倉と顏を見合せ膳を竝べて箸を取るかと思へば、さらに生きたる氣もなし、

其九十

幼少よりの友朋輩ながら、元來うまれて平生の品行よからねば其の後さらに親しう打解けて交りもせず、わけて浮世沙汰の便佞輕薄に寸隙ない奴、明君賢者の世とは違ひ小人原の時を得顏なる今あの會津に不首尾の筈なく、たとひ道に反き理に外るゝとも祿を捨てゝ一身の浪人とはならざる男、その岡田左內が思はぬ幸手の合宿に俄の剛々しき昔語は此奴いよ〳〵一物ありと、早くも見て取りし高倉長右衛門、それとなく餘所ながら眼を注げば、果して我が夢の寢首を窺ひし曲物、

加之も曉方の一言に魂膽を引拔かれて身の置場を失ひけむ、厠へ行きしかと思へば、まだ起出でぬ我が枕の後向を幸ひ、いつしか自己の衣類と兩刀を偸むが如く廊下口へ持出でつゝ其のまゝ狼狽て寢恍面も洗はず朝餐の箸も得とらず逃去りし體に、長右衛門、思はず舌鼓の苦

笑、

さては彼奴、どれほど大切の用ありとも江戸へは向はず、あのまゝ本國へ馳歸ツて先駈の手柄顏に注進すべき筈、固り滿目の敵中へ入るを覺悟の我れながらも、その不意に飛込で忽然また其の不意に飛出さむとせし身が、今更彼奴の注進に網を張て待設けたる用意の眞最中へわざ〳〵可惜生命の捨物に行くよりは、そツと此のまゝ江戸へ引返して、會津の君臣いかな無用の力瘤に我を待つやら、煙も見えぬ遠火に蒸立てゝくれむとの心體、

悠々と朝立の食事を終へて身支度を整へながら、幸手の宿より一里半杉戸まで引返せしが、また俄に思ひ直せし一思案、小首を傾けて步を停めぬ、

いや待て暫時、彼奴の注進をうけし會津の君臣、この長衛が只一人この幸手宿まで踏出せし大膽に舌を卷て驚きこそすれもはや注進の走入りし用意の敵中へ來るべき筈なしと思へば今

ぞ却て平生より油斷の多かるべきを幸ひ、さらぬも臆病風に舐められて荒膽の冷渡りし折柄おもはぬ城門の眞正面へ此の太刀疵の面體ぬッと現しくれむとの心體、

杉戸の宿外れなる葭簀茶屋に澁茶一碗を呑み乾せし後、またもや其儘踵を返して自己が影よりも外に友なき只一人の旅姿、のそりと霜解の草鞋を踏で會津の空に向ひぬ、

其九十一

ほの〴〵と明行く空に會津の城の天主臺を見上げて、大手の門へ眞正面なる麓の大馬場に霜白く、まだ通ひし人の足跡もなき朝ぼらけの松が根に腰うちかけて天より降りしか地より湧きしか忽然と現れて悠然と憩へるは高倉長右衛門、いづこの誰に憚らぬ道中さへ深く面を包み來りし編笠、わざと今ここに脱捨てながら、不敵の面魂を縫はれたる太刀疵、あり〳〵と師走の寒風に曝しぬ、

滿身これ膽魂をもて寸隙なく詰込みし鐵腸の身なれど、この會津の空に產聲をあげて住馴れし我が屋敷も近き故郷の懷かしさ、わけて人しれぬ情の露を宿せる西田村も、城下を外れて僅に二里の野路と思へば、あはれ何とやら袖を引かれて見返り勝の體、その草深き窓より幼兒の泣き聲まで松吹く風に連れて耳に聞ゆる心地、うたゝ懷舊の情に堪へ兼ねながら、男一代こゝに生死の曉ぞと眼を閉ぢぬ、

やがて輝く城の旭日に昨夜の宿直を終へてちら〳〵と大手門より出來る諸士の影、また城下の屋敷町より今朝の出仕を急ぐ諸士の影、次第に近づいて雙方の挨拶と目禮に摺れ違ふ折しも、長右衛門、松が根に憩ひし腰を起して、歩み寄りつゝのそりと無言のまゝに立交れば、諸士いづれも一日に其人と見るや否、あッと驚いて厄病神の舞込みしが如く飛散りぬ、

『や、わづか二年の間に儕も恨みぞよ方々、もはや此の面體を忘れられたか、高倉ぢや、長

衞ぢや、あまり故郷の空の懐かしさに胡馬越鳥の諺、うか〳〵と江戸を彷徨ひ出て前夜こよ
への到著、なれど今は誰を力に頼む友朋輩もなく、また草鞋を脱で歸る家屋敷もなく、聊か
の路用は持參いたせど叨りに町家の旅宿さへ憚りあれば、せめての舊恩に御縋り申して恐れ
ながら御城門近う、あれあの馬場脇の松影に霜を凌いで一夜の宿と致した、これより出仕の
方々へは謹ンで差控へ申す、但し今朝、もはや御用を果て歸らるゝ方々のうちへ昔剛染に折
入ッて願ひたき事あり、誰殿にせよ御一人、この長衞がため我迷惑に預かりたい』
天主の棟に火柱が立つとも、自己の一身に事なき上はさほどに驚かぬ諸士ながら、會津四十
萬石に覘はるゝ生首一個まだ無事に其まゝ胴を放れぬ今この男のため、迷惑を頼まれて堪る
ものかと、いづれも互ひに呆れし顔と顔とを見合すのみ、さりとて流石に武士の面目、きや
ッと叫ンで逃出されもせずたゞ額越に打守りて飢たる啞の混合ふ如き體を、いかに言甲斐な
き奴等とはいへ斯くまでとは思はざりし長右衞門、もの凄き眼に冷かなる微笑を帶びつゝ俄
の大聲、
『見た目は町人百姓の姿でもなく、腰に兩刀を帶して正しく會津の城門へ出入の體、わけ
て面相いち〳〵どこやらに見覺のある人々、武士とこそ思うて聲をかけたに、こりや見違ふ
たぞ藁人形ぢや、藁人形も古昔は時に取て名將の用に立ちしと聞及ンだが、そよとの風にも
得堪へぬ今時の藁人形、そも〳〵誰が手細工で何のため　組立てられた、ハヽヽヽヽ、なれ
ど四十萬石の城中、まさかに藁人形ばかりを積上げた掛小屋ではあるまい、いづれ其のうち
此の鼻頭へ人臭き香のする筈、まづそれまでは元の松が根に腰うちかけて待たうぞ』

其九十二

地獄の底に手を差入れて物を摑み出すよりも、猶更以ての大膽不敵あの高倉長右衞門といふ

生命しらず奴、大手御門の馬場先に現れたりと聞くや否、會津の城中城外いづれも舌を巻て、あッと呆れしまよの反身となりぬ、

藁人形と罵られし諸士の注進よりも、實は二日以前、閉門中の内意をうけて忍び出でし岡田左内が幸手宿より引返せし言上に、城主の明成おもはず舌鼓を打鳴らして、南無三寶、みす〳〵網にかゝり來る可惜ら獲物を取遁したり、慾か汝奴さへ目に入らずは彼奴そのまゝ來るべきにと、無念の拳を握る折柄、おもひきや半途に去るべき筈の高倉長右衛門が脚下に現れたりと聞いて、流石の猛氣も何とやら聊か夢の端を捻まれたる心地、あまりの案外に眉を顰めて奥深き殿中ながら我が身を振返りぬ、

加之も彼奴たゞ一人、どこに何の恐るゝ顔色もなく、また其の身に何の用意せる風情もなく悠々として自己が庭園にあるが如く、城外の松の根に腰うちかけながら、旅路の勞れにや、

をり〳〵居眠る體ありと聞て、餘の事は知らず武邊沙汰には平生の工夫を得たる明成、さては長衛め、この敵中に身を投じて居睡るだけの仔細ある奴、むざ〳〵生命を取られに來た奴でなしと、猶更眼を閉ぢて腕を組始めぬ、

されど重役の面々は高倉長右衛門といふ名さへ會津の禁物と心得たる眼前に其の本人の姿を見るや否俄に目を剝出して狼狽へ騷ぎつゝ、たゞ後日の手落を咎められまじとの一心より外なく城下の出口々々へ窺に人數を配りし上、恐る〳〵改めて嚴命を伺ひ出でぬ、

くわッと滿面に朱を注いて凄じき眼中に四邊を射るべき筈の明成、平生にもあらず氣を靜めて、じッと落著いたる體、

『騷ぐな、飛べばとて跳ぬればとて、もはや火にかけた釜中の魚ぢや、但し彼奴は元來聊か尾鰭の活動も強う骨節まで硬く生れついた奴、まして何の用意もない素肌のまよの自己たゞ

一人、のめ〳〵と此の會津へ白晝の生面を曝しに來たは、いづれ必ず來べきだけの一物を抱へて來た奴、うかとした不馴の若輩どもを慌たゞしう差向けて術に乘るな、重役のうち場數の覺悟あるもの一人、そッと物靜かに罷り向うて何のために來たか取調べて來い、なれど根性の横に強ねた奴、自己が今の身の分際も顧みず、もし萬一、ぢき〳〵我に逢ひたしといはば逢うてくれるぞ、其のまゝ城中へ引入れて武者口の切戸より大庭へ差廻せ、ハヽヽヽヽ久しぶりの一興ぢや、太刀疵を呉れたまゝ二年越の長衛奴が面を見るぞよ、ハヽヽヽ』

其九十三

君の御憤怒も御憤怒、あれほど深き御憎味をうけし曉は、一言の諫爭に其場の首を刎らるよりは却て百層倍の男振が立勝るぞ、人を殺さば罪を恐れて世に忍ばむよりも、あくまで心太く三人五人を白晝の重ね討に叩き斬てこそ、現在その身は草を敷寢の素浪人となりながら高倉長右衛門、あの城外の松が根もろとも槍襖に貫かれず加之も慇懃に差向けられし重役を不敵の鼻頭に挨拶せし上、わざ〳〵本丸の奥深く引入れられて御前ぢき〳〵の御取調あるとやら、いづれ遁れぬ一命は一命なれど、正しく會津四十萬石を自己の敵手に取ッて思ふ存分の武運に叶ふたる冥加男ぞと私語きぬ、

その冥加に叶ひしか叶はぬか男一代こゝに運命の試し場所、本丸の奥深く屋形の中門際に兩刀を差置いて、旅姿のまゝ武者口の切戸より書院の大庭に引廻されし高倉長右衛門、緣端に對ひつゝ大地に脆いて額越に見上ぐれば、さゝと障子の開きし眞正面に加藤家二代の當主明成、態と人を遠退けて何の嚴しき體もなく、たゞ左右に大小姓二人を侍らせるのみ、いはゞ眼前に今は心の底の得知れぬ不敵者を手放しに置きながら、案外の身輕さは流石に猛々しき活氣の天性、わけて當時の諸侯中無雙の大力大兵自然の聲まで音太く響き渡りぬ、

『や、長衞か、久々に見るぞ』

『は、今日の長右衞門、かく憚りもなく直接には恐れながらその後の尊體、ます〳〵御機嫌うるはしう』

『其方も面上の太刀疵、思ひの外に淺うなッたぞ、また度々の敵に渡り合うて無事の體、天晴れ男ぢや、加藤家の祿を食だ頃よりも猶更浪人振を上て見ゆるぞ、いづこの里にも出來た奴、ハヽヽヽヽ』

『いち〳〵何と御うけ申上げて宜しきやら、その儀に就きましては、たど〳〵是非なき事の次第、かくの體と言上の外なき長右衞門奴』

『ムヽ是非なき事の次第と申せば、それでも宜い、結局は過去た事、但し今日わざ〳〵何がため、いかな用ばしあッて會津へ來た、その太刀疵の生面を江戸の市中に曝し足らいでか、生涯また再び還らぬ土と見限ればこそ、相傳の主を振捨てょ立退た奴が、今更どれほどの仔細あッて舞戻ッた、じたい物も言はせず其のまょの縛り首うつ奴ながら、おのれ不思議と生れついた胴骨の太さに免じて武門の餘情かく人扱ひに尋ね取らすぞ、長衞、確と返答せい』

いづれ人しれぬ胸裡に深き一物を抱へて來た奴ぞと、燃ゆるが如き元來の猛氣を押靜めながら、いつしか我れを忘れて叫び出す本音の怖ろしさ、磨澄したる大身槍の鞘走るに似たり、

其九十四

釜中の魚は飛で跳出し袋の鼠は底を喰破りて遁るょとも、自己がためには生きて再び世に出られぬ筈の地獄道、今この會津城中に身を投じて、加之も本丸の奥深き大庭に只一人の高倉長右衞門、まして紙一枚に炎を包める如く怖ろしき猛氣の明成に睨み下されながら、はッと頭は伏せど心も言葉も亂れず騷がず、朗かに冴渡りぬ、

『ものゝ冥加に盡きて人なき里の藪蔭に野倒死でも致すべきが、分相應の成果と思召さるゝ筈の長衛め、ふしぎに生面さげて、憚りもなく御眼前へ罷り出ましたる儀は、あはれ何卒、今後の御仕手を御免蒙りたき哀願にて』

『わざ〳〵何のため、この會津へ舞戻ッたかと思ふたに、や今後の討手を許してくれとの哀願で來たか、但し汝ほどの奴が今更、既に一度ならず二度三度まで心太く働いて退けて今更まさかに土人形を砕いた三歳兒のやうなる心得にては來まい、いづれ其の儀に對して覺悟ある筈、もし今後の討手を差許せば、差許された汝は何となるぞ』

『は、重ね〴〵斯まで深き御憎味を蒙りし身が只一人、まして枯草の葉裏にさへ力と賴む宿もない今日この會津への長右衛門、何となるかは申上げずともの事、偏に御意のまゝながらさて羽翼なき小鳥に鐵槌の諺、あまり曲もなう御意のまゝになり過ぎた奴を御意のまゝに遊ばさるゝは、却て思召に叶はざる道理、また御座興にもならざるのみか、西川兄弟、田島、川上、久世父子、いかに御奉公とは申せこれまで長衛がために可惜身を捨てゝ御用を勤めし者どもあはれ一切こゝに無益の犬死、さりとて此の上、なほ引續いて幾人の御仕手を賜はるとも、もはや以上の人々さへ其の場の働きに容赦いたし兼ねて罪を重ねましたる長衛奴、恐れながら今後また同じ事、勿體なや、有て用なき市井の下司下郎とは違ひ、多年の御恩に育ちし大切の人種を、首尾よう仕終せても高が素浪人の痩首たゞ一個より外に何の獲物もない奴へ、數かぎりもなく白刃の錆に下さるゝは餘りの冥加に恐ろしく心得て、かく御免を願ひあげまする心體』

『や、ほざくぞ此奴、下世話にいふ口も手も八丁ぢや、はゝゝ、敵を遣過して背後より笑顏の揉手する奴、結局は自己の一命無事に禍の根を斷つがため、遙々と此の會津へ我れを拜み

倒しに來たな』

『恐れながら長衞奴、まだ然ほどまで當世風の工夫めいた智慧者にはなり得ませぬ奴、さらさら以て、さやうの仔細らしき儀は、たゞ今後の御仕手を御免の哀願と、また取るに足らぬ一命、何卒このまゝ御見捨の儀を、願ひあげまする爲め』

『ムヽ今後の討手は差許すも、其方の一命、今こゝで取るに足るか足らぬかは一思案、篤と考案物ぢや、是非入用とならば長衞奴、覺悟いたせ』

『はッ、會津四十萬石の御家柄に是非とも無くて叶はぬ御入用とあらば、聊か持古しました る品ながら、謹ンで獻上、但し四十萬石に一粒たりとも、缺けての御入用とあらば、せめて冥途への語り草に高倉長右衞門が一刀の使ひ工合を御許しのほど願ひあげまする』

『憎い舌を動かす奴ながら、その太々しい性根が面白い、聞届けたぞ』

其九十五

首と胴と放れし死骸を薦に卷て投出さるゝかと思ひの外、無事に生きたる高倉長右衞門、ただ前後四人の徒士に手放しの警固されながら、のそりとして大庭より現れ來りし體を見るや否、武者口の切戸外に私語き合ひし諸士の面々、あまりの案外に目を剝出しぬ、加之も本丸を引出され、二の丸の詰所に伴はれつゝ、重役よりの申渡しには、あらためて思召の下るまで三日の間、城下いづれなりとも勝手次第の旅籠住居を差許さるゝとて、取上げし兩刀を返され只一人の徒士、その宿所を見屆けのために附添へるのみ、大手の城門より追放されし體を見るや否、諸士の面々また猶更呆れて、物を得いはず不審の眉を顰めぬ、されど本人の長右衞門、これぞ鯨に拋込む漁槍の業、網にも釣にもかゝらぬ奴を仕て取る放討ち、流石に武邊の沙汰のみは天晴れ出來たる君なりと、おもはず心のうちに微笑を含んで

歩み出しぬ、

まして煮るも燒くも鑄一文の費用なく手のうちへ入りし筈の我れを、あまりの不意に思はず扱ひ過ぎて、うかと張合はれし言葉の勢ひより、素浪人の首一級を會津四十萬石に買被りし今更ら、其のまゝ城中にての手料理もならねばわざと城外の町宿を俎板として、この長衞に庖丁加減を加へむの思召あり〳〵見えたり、されば我れまだ四十萬石を一粒たりとも缺けての御用には、恐れながら此の首を容易う獻上いたすべきや、風に家庫を卷揚ぐる旋風あり、人に鐵壁を貫く不思議の業ありと、物凄き眼に城の櫓を見返りぬ、

城下の町の中央、四方の辻に當れる大木戸の角、市中第一の旅籠屋に宿を求めて、加之も晴がましき表二階の一室を借受けつゝわけて會津の空には風聞の種を殘せし面上の太刀疵、誰が目にも其人と知らるゝ面魂を會釋もなく突出して、欄干に頰杖のまゝ往來を見下しぬ、

さらぬも城中城外の取沙汰、まして此地に生れし親重大の千石取、白晝は世間の耳目を恐るゝとも、せめて一人の夜更けし後、そッと竊かに訪來りて慰めもし諫めもすべきもの、あるべき筈の故郷に知己の誰彼は數へ盡されねど、さて人情は紙よりも薄き世の中、あつき情の露も雫もなく、たゞ往來より餘所ながら乾き果てたる目を欹てゝ何が面白いやら彼あの生命しらず奴と言ひたげなり、

其九十六

故郷の空なれど今この身に誰一人の訪來るものなく、あらためて思召の下るまで三日の間といへば、その三日の間が但し四日目の此の障子に移る人影こそ、正しく城中より差向けらる生命取の使者、固より覺悟の前、いつ何時たりとも、ござンなれとの高倉長右衞門、その二日目やう〳〵、今しも暮れて、燈火の下に夕餐の箸を放せし折柄、案内の下女が聲も

ろとも障子の外へ、ちらと移りしは武士の兩刀、
長右衞門、眼を据ゑて、じろりと其の影を打守れば、靜かに障子を開けて差覗きし顏は、や、
江戸にあるべき筈の神尾備前守、
『さて押へたぞ、たど一通の書面を差置いたまよ、この老人を出抜いて濟むと思はるゝか、わざ〳〵師走の空に用もない寒氣の會津まで怨みに來た、ハヽヽヽ』
どこまでも例の氣輕き老體に、長右衞門、はッと思はず座を辷りて容を正しぬ、
『いかやうの御謝罪、何と申譯いたしても長衞奴の一分、迚も相立ちませぬ事、さて〳〵御老體こゝまで來せらるゝとは夢さら、但し大略の儀は、あの書面にて御推察のほど』
『や、來た上は來た老爺、もはや其事に就ての心勞無用ぢや、また書面の趣も篤と承知いたしたが、さて長衞殿、あるに任して餘り瞻玉が跳過ぎたぞ、いかに手丈夫とて、ちと腕節が

鳴り過ぎたぞ、當初の委細は聞くに及ばぬ、うかと致した町家の小者に聞てさへ此の、この旅籠屋に貴方のある事を教へらるゝほどの體、まして現在、今朝この會津への入口で既に人數配置の用意を見て來た、やれまだ何事のないうちに逢うて重疊、實は萬一のため、幸ひの隱居仕事ぢや、及ばずながら見物かた〴〵後見にまるッた、ハヽヽ見る影もなう年こそ老たれ、まさかの時の足手纏綿にはならぬぞよ』
たとひ無念の縛り首を討たるゝ死際にも一滴の涙、あるまじき男ながら、たまり兼ねて兩眼より、ほろ〳〵と落しぬ、
『いかなれば、この長衞奴を何の御緣も持たぬに、それほどまで深う御意に懸けられまするやら、親重代の土地でさへ誰一人、昔馴染の訪來るものも無い世の中に、歷々の御老體として、はる〴〵この會津まで、但し高倉長右衞門といふ有て用なき素浪人のため、もしや後日

の御迷惑』

『いや〳〵眼前も後日もない、また相手の誰彼もない、土地ところの場所も選ばぬ、きけば捨置けぬが持病ぢや、ついては道中の用便もあり、聊か心得のある若黨二人を供に連れて來た、階下に待たせてある、これへ呼上す以前、まづ聞置きたい、もし今日、當加藤家の仕向次第で一切、いよ〳〵會津を忘れらるゝか、今後この老爺が肝煎で推擧いたさば、浪人を止めて他に奉公するほどの手切沙汰、きツと立てらるゝか、今こゝで言はずともの事ながら、こりや老人の打割けたところぢや、ハヽヽヽヽ』

長右衞門何をか胸に呑込みしが如く、太き首骨を垂れて首肯きぬ、

『もはや今日、この場に立至りましたる事、たとひ其のお言葉なくとも、この會津には、よくよくの緣ない男』

其九十七

いはゆる放し討とて、わざと城下の旅籠屋に勝手次第の宿を差許せしが、はや會津の出口出口には嚴しき警固の人數を配りて、樹間を飛交ふ小鳥の羽影にも油斷なき折しも、兩若黨に駕を飛して馳來りし老人、何者ぞと咎むれば、前の江戸町奉行神尾神備守、當時は隱居分ながら御領内へ入込みし筈の高倉長右衞門といへる浪人に急々の所用ありて罷り通る、こゝは天下の御關所とも存ぜぬのみか、いづれ御城下に宿を取るもの萬一の御不審あらば追ツての御取調を相待つとて、其のまゝ駈拔けしとの注進を聞くや否、城主明成、おもはず膝を打ツて南無三寶、加之も其の老人奴、長衞と同じ宿の同じ一室に泊り込みしと聞て、猶更無念の拳を握りぬ、

さては彼奴、公邊の筋目ある江戸の直參衆に幸ひの面疵を賣込ンで、わざ〳〵この會津へ楯押の手切證文に來た奴、もし我より手を出さば屑を反して既に何の某が家來と吐すべき奴、もし此のまゝ捨置かば白晝これ見よがしに大手を振て悠々と立去るべき奴、さりとて藤典厩の長子に生れたる我こゝに會津四十萬石の面目もなく、もとの飼犬に向脛を噛まれながら尾を卷揚げて去る奴おめ〳〵其のまゝに見遁さるべきや、他國他家への外聞は固より現在の我が臣下に對しても今後の手前あり、おのれ無事に差置くべきかと、面上を逆撫にせられしが如く、人しれぬ血眼を釣上げぬ、

さりとは知りながら神尾老人、その翌日、内々そッと加藤家の重役が許を訪うて老の言葉を和げつゝ、加之も打解けたる體に膝を交へて申入れぬ、

『高倉長右衛門こと、元は御當家の臣下ながら、當時は江戸表にて浪々の折柄を幸ひ、我等の肝煎より實は近日さる諸侯方へ奉公濟の内約も大略、取極まりしものなれど、從前兩三度の御仕手を差向けられし身が、たゞ其のまゝでは後日のため一身上の難は儲置、もし舊恩の君と新恩の君と兩家の間柄に萬一の葛藤あらうかと存じて、わざ〳〵本人これへ推參いたせしとの事、ついては肝煎役の我等こゝに改めて申入れたき一義は、何卒、今日かぎり彼奴を世に無き者と思召して御見捨下されたい、既に御不用なればこそ二年以前の御暇になりし男まして紛れもない面上へ御勘當の刀痕まで附けて追放されし男、たとひ其の後、御討手を遣はさるゝほどの仔細ありとも、その討手の衆いづれも働くだけ働いて仕損ぜし上は、これまた自然と御憎味に漏れし筈のもの、よく〳〵の御目こぼしもの、町家にて申さば帳尻の差引相濟だ算盤珠の桁に外れしもの、ハヽヽヽさるを御家柄にも似合ず、また彼れ一人の外に武士らしき御家來ないかのやう、あまり彼一人を物惜み遊ばさるゝかのやう、猶この後の御勘

念は却て世間への外聞、かた〴〵以て可惜ら御名門の瑕瑾かと存ずる、但し會津の家風その儀に拘らず、否あの長衛め是非に御用ありとの仰せならば、骨節も巣枯れて御料理甲斐のない老爺ながら我等もろとも御用に召上げられたい、さも無うては肝煎いこと〳〵し先方へ對して此のまゝ一分の立たざる場合、いづれに致せ、確とした御處分を相待ち申す、もし明日中に何の御沙汰なくば明後朝、御免なりませ御届けも仕らず高倉長右衛門を召連れて出立せしもの〳〵と御承知置下されたい』

慇懃のうちに何とやら傍若無人の體、自己が云ふだけの事を憚りもなく饒舌立てゝ後、たゞ白髪の禿頭に一禮を殘せしのみ、すッと座を起ッて其のまゝ宿へ歸りぬ、

其九十八

もし明日中に何の御沙汰なくば、明後朝、お届けも仕らず出立いたすべしと、逆寄に押寄せて念を入れし後、雨か、風か雲行いかにと待ちしに宿の廂へ枯葉一枚の散來る音さへなければ、いざとて俄に會津の城下を立去りぬ、

武士として退くに退かれぬ意地には敵を選ばぬ常慣ながら、際限ある身の行末に際限なき討手を引うけて、加之も罪なき昔の友朋輩を無益の白刃に疊みかけむよりは、運を天に任して生死の境に我れたゞ一人その面倒の總仕舞にこそ來れ、かくなるべき事の結果を仕組で斯くなりし工夫の我れにはあらねど、もはや自然の成行こゝに立至りし上は是非もなしと、高倉長右衛門そのまゝ神尾老人と早籠を聯ねて眞一文字に江戸の空へ走向ひぬ、

よく〳〵主從の緣なければこそ、この本國を立退きし浪人の數ある中に我れのみ斯くの體、見返る會津の城に今更の心は殘らねど、おもへば僅二里を隔てし西田村の夢にも知るまじ我れこゝまで來りしとは、あはれの女よ、いぢらしの子よと其の身こそ夢にも知らぬ母子の身

の果を恩愛の袖に忍ばせて流石に一滴の涙もろとも駕より振返りぬ、

神尾家の若黨二人、おの〳〵街道の小荷駄馬に跨りて、前後の中間に老人と高倉の駕二挺、會津領分の境なる唐澤の宿まで來かゝりし時、ふと見れば、前途の松原より身輕き旅裝束の武士十餘人、ぞろ〳〵と歩み出でて道の中央に立塞がりつゝ、また遙の背後にも同じ十餘人の影、いつしか押竝んで歩み來りぬ、

先に立ちし若黨、おもはず馬より飛降りて轡を取りながら、そッと聲を潜めぬ、

『や、じたいの知れぬ怪しい奴原が隊を組で十餘人』

後に立ちし若黨、また馬より飛降りて聲をかけぬ、

『御免なりませ、背後よりも何とやら同じ臭味の奴原』

前後の聲に神尾老人、駕の垂簾をあけて白髪首を差出しぬ、

『ム、出たぞ、いよ〳〵出をツたぞよ、いかに當時の會津とて木像ばかりでなし、これほどの事なうてはならぬ筈ぢや長衛殿、そと用意めされい』

高倉長右衛門、悠々と駕より立出でて前後を見廻しながら、羽織りし道中合羽を脱捨て、大刀の柄袋を取外し、腰の上帯を堅く草鞋の紐を結び直しつゝ、音太き聲に微笑を含ンで打笑ひぬ、

『三歳兒さへ物の二度三度には必ず自然の心得あるに、やれまた性懲もなう、入らざる無用の骨折業をせらるゝぞ、釜中の魚となッても其のまゝ煮られぬ我れを今更、ハヽヽヽ、御家來衆、御老體に萬一の事なきやう、それ、あの樹蔭にて、や、人足ども近寄ッて怪我するな、遠退て見物せいおのれ等が辻講釋で聽くよりも面白い太刀打を見せてやるぞ、但し馬駕の駄賃と見物料との差引ぢや、ハヽヽヽ』

其九十九

これほどの事なうて叶はぬ筈、此のまゝ駕に居眠りながらの江戸到著は、あまり無事過ぎたりと神尾老人の言葉に、高倉長右衛門も實は兼てより覺悟の體、無益の殺生なれど是非もなき業ぞと、自己たゞ一人、街道の中央に仁王立となりつゝ次第に近寄來る前後二十四人の敵を待受けぬ、

前より押寄せし十餘人、いづれも身輕の用意に力足を踏ンで其のうちの先達めいたる一人まづ聲をかけぬ、

『や、高倉殿、長衞殿、江戸への御見送りに昔馴染の我等これに待受け申した、さて何をか御餞別に進らさうか』

また後より押寄せし十餘人、はや大刀の鍔際に左手の母指をかけつゝずらりと寸隙もなき人

垣を築出しぬ』

『高倉殿、長衞殿、知らるゝ通り此處は會津の領分境、もはや一歩の外は加藤家に緣なし、緣なしといへば我等また今日かぎり御暇を乞うて他國へ退轉の俄か浪人、貴方も固り浪人、いづこの誰に關係のない浪人同士ぢや、わけて元は同じ土に根を持つた友朋輩、せめての訣別、お馴染甲斐に一太刀づゝの御稽古を願ひたい』

高倉長右衞門さらに何の小盾もない一本立のまゝ、くるりと體を捻ッて前後の敵を左右に引受けながら、滿面の冷笑に太刀疵いよ〳〵深く現れて物凄し、

『さて〳〵平生は何の音沙汰もないに、今更ら事々しい餞別振ぢや、それには及ばねど折角の芳志、うけ申す但し加藤家に緣なしといはど猶更ら以て用捨はせぬぞ、いかにも長衞一流の太刀打、生きて再たび此の世に還れぬ傳授いたさう』

わざと路傍の樹陰に退いて、切株に腰うちかけし神尾老人、つか〳〵と歩み出れば、前後よ
り等しく敵の聲、

『やれ危ふし、いづれの御老體かは存ぜず、諺にいふ老年の冷水とやら、もはや斯くの場合
に入らざる御無用立、御自分の年相應そこ退いて見物されい』

さらぬも活氣の老人、きくや否、白髪の禿頭に朱を注いで、兩若黨に下緒の襷をかけさせ野
袴の股立を取らせながら、絲柄目釘際を音高く叩きぬ、

『こりや若輩ども聞けよ、老年の冷水とは豆腐屋が石屋の指圖する事ぢや、老たれど武士は
武士、同じ道に出るが何の不思議、第一またこの高倉は或諸侯より我れ等の預かりもの、ま
だ乳の香の失せぬ分際で、ハヽヽヽ加之も汝等、もはや加藤家を立退いたとあらば浮浪無
宿の奴原、天下の直參に對うて白晝の生偸人に來をツたな、よしさらば取ツて見よ、や長衛
殿お身は前なる奴原へ、我等主從三人は後の奴原を引受けたぞ』

冬の日のきら〳〵と晴渡りて、街道の砂さへ白く照り返へせる唐澤宿の空より、今にも、降
り出ださうとする血の雨の雲行、

其百

會津の領分境、その唐澤宿へ不意に現れし前後の二十餘人、いづれも加藤家に名を得たる武
邊者のみを一粒選として、あの首を取るか取らぬか、これぞ最後の討手に差向けられしほど
の者共なれど、高倉長右衞門また男一代この首を渡すか渡さぬか生涯の太刀打、さらぬも不
敵の面魂に懸命の眼を据ゑて取かゝりぬ、

固り活氣の神尾老人、何として他所に見るべき、また白髪の禿頭を振立てゝ一刀の柄に手を
かけしが、これほどの晴業に情の袖幕は却て心辛し、たゞ願くば萬一の骨を拾はれたしとい

ふ長衞が言葉にさらばとて、其のまゝ兩若黨まで後見の體に退きつゝ、老の血眼を張て差控へぬ、

敵は前後より二十餘人、味方は我が影より外になき長右衞門たゞ一人、やッといふ聲もろとも眞一文字に駈込で斬入るかと思ひの外、街道を横に飛降りて田甫路に走込みしが、くるりと俄に身を飜すや否、追來る敵に向うて忽ち電光石火の猛勢、左右は脛腰の立たざる冬の深田、足場は三尺に足らざる霜柱の畦道、敵の人數は二十餘人なれど太刀打は一人づつ鼻と鼻との眞正面に何とて堪るべきや、積重ねし藁束を斬割くに等しく、ばたり〳〵と音して血煙の渦巻く中より阿修羅の如き長右衞門、踏越え乘込で踊り出す體、あまりの美事さに神尾主從おもはず聲をあげて、人間業でないぞと叫びぬ、

さしもの二十餘人、九人まで蟲の息も殘らず斬斃されて七人の半死半生、あとは其のまゝ太刀風に散失せしが、長右衞門また流石に全身十四箇所の血を流しながら、よく〳〵の業を洩來りし鋒鉦いづれも絲曳く如き淺疵のみ、神尾主從に介抱せられて四枚肩の早駕に舁乘せられ、唐澤より三里の横田村に外科醫ありしを幸ひ、當座の療治を施せしまゝ一夜の枕にも就かず、驀地に江戸の空へ馳歸りぬ、

高倉長右衞門、前後三度の仕手をうけて七箇所の手疵を蒙りし上、また唐澤の追討に十四箇所の手疵を負うて、加之も面上を斜めに縫はれし加藤家の餘波もろとも全身二十四箇所、誰が目にも天下泰平の今日には武士として名玉の面魂、またあるまじき天晴の男振いづこの何者ぞと江戸市中の風聞に高く、あれこそ前の町奉行神尾備前守が自慢の祕藏客なりと聞て諸侯より日夜懇望の使者に爭はれしが、戰國の一萬石、當世無事の三千石ならでは奉公させ

難きもの、それも恐れながら此方に主取の選擇ありとて、神尾老人いよ〳〵惜氣に聞入れぬ折しも使者さへ立てず其の身わざ〳〵不意に襲ひ來りしは、新に本國より出府參勤せし讃州高松の城主生駒壹岐守、やれ外へは遣らぬぞ東海道の三島宿ぢや先口の約束ぢやとて、神尾老人に喧嘩腰の笑を吹ッかけながら、無理無體の二千石に引摺歸りぬ、

寛永二十年の九月、多年の暴政その器に叶はずとて、あはれ四海に轟きし藤典厩の二代目、加藤式部少輔明成が會津四十万石を一時に召上げられ、別に石見國の吉岡へ堪忍分として一万石の日蔭に遷されし時、平生は地獄の底までも御供せむと言囃せし家臣いづれも俄に四方へ散じて、たのみ甲斐なき浮世の袖に秋風落葉の空、うたゝ人生の感に打たれて、鐵壁を打割りし流石の猛氣も何とやら燈火の下に心淋しき折しも高倉長右衞門、生駒家より一年の暇を乞うて石州の配所へ駈行きつゝ、太刀疵の滿面に男泣の涙を漲らして侍女の如く仕へ、朝夕その憂を慰めしかば、明成また今更に後悔の涙を呑で長右衞門の言葉に從ひ、その後の生涯を別人の如く吉岡一万石に身の足る事を知りて、詩歌連俳の風流三昧に世を安く送りぬ、

石州の吉岡より涙もろとも江戸に歸りし長右衞門、いよ〳〵白刃に花を添へたる男なりとて、生駒家の侍看板に持囃されしが、壹岐守また大事の使者には必ず長右衞門を遣はして諸侯に羨ませ、その身の出入には必ず長右衞門を飾り立てたる名馬に乘せて、市中これ見よがしの寛活に往來せしかば、ます〳〵面も名も誰しらぬものなき當時の名物男となりぬ、

高倉長右衞門、一夜、同藩の朋輩六七人と打連れて松平大和守が家老檜山覈負の許へ招かれ

し酒宴の半、侍女どもに立交りて十一二歳なる兒小姓の銚子を持出でし風情、いかにも可愛ければ近く呼寄せて、酌せよと命ぜし時、その兒小姓、恐る〳〵長右衛門の顔を見上げて思はず兩眼に涙を含みしかば主人の叡負、や、不吉ぞ立退けと叱りしに、なほ立去らで其のまま打伏したる體、あまりの不思議さに何事かと問へば、いよ〳〵泣いて聲を曇らせながら、紛れもない御顏の刀痕は兼てより聞及びし我が父上に似ませりとぞいふ、長右衛門、眉を顰めて汝の母は何といふ名ぞ父の名を語れとの言葉も待たず、母は小夜と申しまする女、祖父は小林兵助と申しまするもの、私は孤兒となりて御當家へ近ごろ奉公いたせしもの、もしや貴方樣の御姓名、もとは會津の御家來、その後は御浪人遊ばれし、高倉長右衛門樣と仰せられずや、それならば正しう父上と聞くや否、ぐツと膝に引寄せて滿座に對ひながら御免なりませとて、三歳兒の如く掻き抱きしまゝ次の室へ遁込みぬ、

長右衛門、生駒家に召抱へられし時、これも斯くなるべき自然の緣かや、今更ら遁れぬ浮世の義理と人情の柵に迫りて、神尾老人が親類の娘分を妻に迎へながら、人しれぬ心のうちの朝夕、春の花にも秋の月にも忘れ得ざりし昔の夢を、おもはぬ他家の酒宴に孤兒となりし我が子の涙より語り聞かされむとは、

小林兵助は江戸に出でて一年の後、深川の佗住居にて病死、小夜も三年以前まで、あはれや赤阪の吉川賴母といへる旗本の家に炊飯奉公しながら、その子を門番の阿爺に託して育てしほどの境涯に落果たればこそ、紛れもない我がこの面を世間の取沙汰にさへ探し得ざりしかと、猶更ら涙の種の委細そのまゝ押包めど、只これぞ正しく十餘年の昔に殘せし一子なりと神尾家にも妻にも打明して、幸ひ子なき家に一入の全盛を唄はれぬ、

寛永の年も過ぎて正保四年、生駒家の當主壹岐守の死後、家門の一族中に幼主を傾けむとせし者あり、加之も藩内の半以上これに與せしかば、かゝる事より家名を取潰され領地を沒收せらるゝ諸侯の例多き折柄、高倉長右衛門、先君の知己に盡すべき奉公最終として一時に禍の根を斷たむがため、わざと奸黨に入りしが如く其の重立ちしもの十七人と郊外の隱家に密談の席上、俄に躍りかゝツて一人も遁さず打果せしまゝ血糊を踏で出奔せしが、その時うけた る太刀疵二十八箇所、さても不思議や、また悉く急所を外れて人知れず待受けし正黨に運ばれ、其まゝ一年あまり遙の攝州有馬の溫泉へ入湯せし後、のそりと再び江戸に出でて浪人せし體を見れば、手といはず足といはず五體に寸隙なき滿身の刀痕、蜘蛛の巢を張れるに等しく、以前の相貌に打變りながら、變らぬものは天性の豪氣雄猛いよ〳〵怖ろしく、其の後の生駒家より内々の重き扶持せられつゝ、市中の往來には道を讓られ、いづれの座席にも摩利支天の再來とて額越に打仰がれぬ、

高倉長右衛門、さても希代の武運に叶ひし冥加男とて、浪人ながら平常より親しく諸侯方に召されしかば、五十二歳の正月元旦、廻禮のため馬上にて立出でしが、雨後の泥穴に馬の蹄を踏込で横ざまに倒れ落ちし時、四箇所の疵口さツと破れて黒血を吹出せしに、實は今まで人にもいはず聊か手足の筋骨を引かるゝ心地して、もはや剛敵への太刀打なるまじと思ひし身が、此の時より却て五體の屈伸また元の如く心のまゝの自在を得しのみか、九十八歳の高齡まで蟲腹一度の病煩もなく生伸びぬ、

されどこゝに一事の遺憾は、神尾家より迎へし妻を三十五にて亡ひ、昔の情に宿せし戀の一

子を十八歳の暁に病死させしが、浮世にある人間の常、切てそれほどの事なうては、あの武運めでたき不思議の冥加男は出來まじき筈、あの年齢まで無事に妻子を持たして堪るものかと笑はれぬ、

浪六全集　第九編　終

浪六全集第九編

大正四年二月三日印刷
大正四年二月八日發行
大正四年二月二十日再版
大正五年八月十三日三版
大正五年十月十四日四版
大正六年九月十日五版

大正七年四月十六日六版
大正八年十一月十三日七版
大正八年十二月十五日八版
大正九年二月十五日九版
大正九年九月廿八日十一版

不許複製

著者　村上信
發行者　加島虎吉　東京市日本橋區本石町三丁目十四番地
印刷者　田中三郎　東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場

發賣所

東京市日本橋區本石町三丁目　至誠堂書店　電話本局　長三六六六番　二一六七番　振替口座東京一七四四番
東京市日本橋區人形町通住吉町　至誠堂第一分店　電話濱町一九四九番　振替口座東京一六三六番
東京市本郷區本富士町二番地　至誠堂第二分店　電話下谷二五〇二番　振替口座東京一六九四番

井上十吉先生畢生の大事業完成す

井上和英大辭典

學英て初め出典辭本

◆原稿用紙百五十萬枚◆
◆校正廿校以上卅校◆
◆旣然參千壹百余頁◆

語數五拾萬

＝誤植絕無＝製版頗る巧緻鮮明なり

◎縱六寸三分◎橫三寸五分
◎新式活字◎總クロース製
定價金八圓　郵稅卅四錢

現り依に出現の典辭本

曩に井上先生英和大辭典の大著を公にして現代英學界に一新紀元を劃したるは諸君の均しく認識せらるゝ處なり。本辭典は前書の姉妹書として粒々辛苦の結果漸く完成を告げたる現代英學界空前絕後の一大貢獻にして前書と併立して日月並び懸るの壯觀を現出したるものと云ふべく、其の內容の偉大なる宇宙森羅萬象荷も文字を以て表はし得る限りの語句は悉く網羅し、巧妙

去過の和英辭典を決一然

界の自由鄉理想境は茲に開拓されたり

本書編纂の爲に
官を辭したる
著者の意氣と
苦心を想へ

本書は未だ曾て何人も企及し能はざりし日英兩語の完全なる融合を遂行し、和英辭書の總べての必要條件を悉く備へたるものにして、正に一切の和英辭書の集大成とも云ふべく、實に空前絕後、斷じて他人の模倣追從を許さず。其實質と價値は永久にして絕對無限、卓然として最高の權威を無窮に保有する大著なり。苟も英語を修めて其正確を期し、蘊奧を究むるの速ならんことを希ふの士は、過去の辭典を一擲して本書に來れ。是れ實に忠實眞摯なる士の現前に執るべき態度也。

代英學界は急速度の進歩を感ずべし

斬新なる合理的編纂法を以て排列し檢索の至便等曾て其比を見ず。譯語の正確剴切なるは著者の獨擅場にして故事成句慣用句を悉く集め英譯法の正範たるべき文例を豐富にし日本語脈と英語脈との融合を遂行したる等未だ曾て本辭典の如く完璧に達せる理想的大辭典はあらず。試みに一本を手にせば本書が如何に類書に卓然として傑出せるかを認め得べし。苟も英語を修め其正確を期し蘊奧を究むるの速ならんことを希ふの士は、過去の類書を一擲して本書に就かざるべからず。

擲し て本辭典の權威下に信賴を捧げよ

辭書界の權威

【井上十吉先生著】

井上 英和大辭典

◆紙數本文二千三百二十六頁◆附錄數十頁◆語數實に二十萬語◆縱五寸六分◆橫三寸一分◆總布製金文字入特製堅牢美本◆

■定價金五圓■ 郵稅內地金拾八錢

英語學上の三大要件

第一に自己の努力
第二に良師の誘導
第三に本書の使用

▼とは英語學習上の動かすべからざる眞理として學者の一致する所第一第二は勿論第三また決して誇張の言に非ず確固たる事實なり何となれば自己と良師とに次では辭書の動力を最とすべく而して辭書中の辭書は實に井上英和大辭典なれば也

語數の豐富
譯語の明確
文例の饒多
註解の懇切
熟語の網羅
術語の詳解

新語の包含
發音の正確
檢索の至便
編纂の功緻
印刷の鮮明
製本の堅牢

なる點に於て本書は一切の類書に冠絕す

◆全國中學校に於て指定の光榮を得◆

英學界の福音

【井上十吉先生著】

井上 英和中辭典

中等學生諸君の絕好師友はこれ

本書が中等學生用として完全無缺なるは弊堂の確信して疑はざる處にして本書の諸君に於けるは恰もプロペラの飛行機に於けるが如し、殊に本書が絕對の特色とするは井上先生の懇篤なる溫情が書中隨所に流露して中學生諸君を指導するにあり。

◆紙數千四百餘頁◆挿畫五百餘個◆新式ナンペル活字◆總假名付◆縱五寸◆橫二寸五分◆總布製堅牢美本■定價貳圓六拾錢 郵稅拾錢■

本書の特色

◎教科書中の語句の網羅◎
◎假名應用發音法の完成◎
◎譯語の平易解釋の正確◎
◎熟語及び慣用句の夥多◎
◎最新語の豐富なる收錄◎
◎文法上說明の周到懇切◎
◎略語他國語の本文配列◎
◎重要なる固有名詞詳解◎
◎振假名と挿畫との豐富◎
◎內容の充實容積の輕便◎

◆完全にして簡便なる唯一の中辭典！◆

浪六先生傑作

裏と表

勞働問題を取扱へる傑作！

一枚の紙にも裏と表とあり、まして複雜なる社會の人間萬事、いち〳〵これに裏と表の無きものはなし、浪六先生茲に人生社會の表裏を究めんとして勞働問題の悲劇の裡に悲痛哀艶、痛快壯絶の幾場面を紙上に描出したり、興味津々たる近來の快小說として必讀を乞ふ。

菊各拾版冊錢
上金
製貳郵
美圓稅
本後各
前編冊
編壹金
中圓拾
編五錢

裸體の人間

文明の粧飾を悉く剝ぎとりて「裸體の人間」こゝに出でたり製本また總ての無用なる粧飾を廢して趣味と實益の兩方面より內容を充實せしむ。浪六先生近來の傑作人間あらゆる階級に薦む。

四六版上製全壹冊
紙數四百余頁
定價金貳圓
郵稅金八錢

浪六先生著

天眼通

痛快輕妙の筆致奔放自在の想は天馬の空を行くが如し

小說としては殆ど十年ぶりの新作にして、所謂浪六式を遺憾なく發揮せるもの、痛快深刻の極

菊判上製美本
前編定價金壹圓八拾錢
中編定價金壹圓八拾錢
後編定價金壹圓八拾錢
郵送料各金八錢

川德

時勢は無遠慮に內容薄弱の小說界を一掃して、新たに本書を讀者諸君に薦む。

菊判上製全二冊
前篇定價金壹圓八拾錢
後篇定價金壹圓五拾錢
郵送料各金八錢

浪六先生著

□四六判上製美本□定價壹圓八十錢
□紙數三百數十頁□郵送料金八錢

出放題

輕快口を衝いて出づる著者
一流の樂天的放語を聞け!!

世の中に遠慮會釋もなく、思ふまゝを八方八ッ當りに吐き出したるもの、著者の遺憾なき本領こゝに在り

我五十年

四六判特製美錢
紙數四百六十餘頁
定價金貳圓五拾錢
郵税金拾錢

口繪
著者自書自畫
コロタイプ珍品
十數葉

事實は小説よりも奇なりと云ふ語は始めて浪六先生の「我五十年」に證明せらる、生れて今日に至るまで人生の波瀾を極めし先生の一代記を最も大膽に最も露骨に告白せるもの、机上の筆を以て書きしにあらず、現在の身を以て著はせる五十年間の生證文にして所謂文士なるものの自敍傳にあらず。

浪六先生著

大正五人男

菊判上製美本 全一冊
定價金 壹圓八拾錢
郵税金 八錢

一大奇書

廿餘年前に讀書界を震憾せしめ今日なほ出版を重ねつゝある當世五人男の著者浪六先生茲に又新たなる大正五人男を世に出さる

男女の戰 正續

全二冊定價各金壹圓廿錢郵税各八錢

●誠實の和睦は戰の後にあり、神聖の戀愛は男女衝突の後に生ず
●男女あらゆる階級の衝突、男女あらゆる思想の衝突是れを讀まざるもの今日の男女にあらず
●社會あらゆる階級を網羅せしめ男女の戰ひ、いよ〳〵白兵戰に入る、男女兩性を赤裸々に剝出したる人生の裏面史なり

黑雲

全一冊 定價金壹圓廿錢 郵税八錢

雪達摩

全一冊 定價金壹圓貳拾錢 郵税八錢

縮冊 浪六全集

第一編
- 當世五人男
- 同後編
- 黒田健次
- 同後編
- 同續編
- 最後の黒田健次
- 同後編

第二編
- 上田力
- 同後編
- 同續編
- 倉橋幸藏
- 同後編
- 同續編

第三編
- 川上三吉
- 同後編
- 同續編
- 吉田雄藏
- 花車
- 品さだめ

第四編
八軒長屋
上卷

第五編
八軒長屋
下卷

第六編
- 鬼あざみ
- やまと心
- 日本武士
- 金剛盤
- 同後編

第七編
- 最後の岡崎俊平
- 同後編
- 魚屋助左衛門
- 呂宋助左衛門
- 古賀市
- 武士氣質

第八編
居家處世
人間學
正編 續編
うき世の裏表

第九編
- 男山
- 同後編
- 男一疋
- 高倉長右衛門
- 同後編

▲袖珍特製箱入
頗美本
定價各冊
金貳圓
▲郵稅各冊
金八錢

第十編
- 當世三人兄弟
- 同後編
- 同續編
- うやおや日記
- 元祿武士
- 同後編

第十一編
- 毒婦
- 同後編
- 同續編
- 仍如件
- 同後編

第十二編
- 大惡魔
- 同後編
- 夜叉男
- 同後編
- うきよ草紙

第十三編
- 原田甲斐
- 同後編
- 同續編
- 武士道
- 同後編

第十四編
- 當世女
- 元祿女

71
489

終